心神開発物語 -このまま滅んでたまるか!-

有田志音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心神開発物語　―このまま滅んでたまるか！―

【Ｎコード】

Ｎ５３４３Ｕ

【作者名】

有田志音

【あらすじ】

「憲法９条に則って、自衛隊を解散させます――」

２０１１年８月２６日、追い詰められた民主党菅内閣は辞任とともにそう発表した。

東西に割れる日本、中国軍の進駐、その混乱の中、人々は――。飛び交う憶測と謀略。そんな中、■■は、２０年の時を経て目覚めようとしていた…。

◇◇◇いつも有難うございます。おかげさまで２０１１年１０月１７日、２０００ユニークを超えました。本当に、ありがとうございます！

1．幕開け　―　０１（前書き）

ある種の鬱憤晴らし。肩の力を抜いてお楽しみください。

1．幕開け　―　01

２０１１年１２月、大阪。
本来この年末、いついかなる時でも人がごった返す、難波、梅田、道頓堀、天王寺。
しかしそこにあるのは、無数の骸と無窮の闇、であった。否、今、何かが動いた。
――人だ、それも、まだ年端もゆかぬ子供ではないか。
しかし、その手に持つのは、――８９式自動小銃
そして、背には…ム、無反動砲！？
「うぁ……」
子供は這いつくばったまま、その小銃を彼方へと向ける。
――空音
しかしその銃が火を噴くことはなく、その子は悲鳴を上げることなく地に伏した。
「是做，由於做，這個今天第２０人」
！？
――中国軍？
なぜ、ここに、武装した中国人が？いや、そんなことより子供は！？

彼は、無残にも腸を切り裂かれていた。
臓器売買が半ば合法化している中国だからこそ、死体は貴重な収入源なのだ。
ぐちり、ぐち…、鈍く、生臭い音が木霊する。
かわいそうに、まだ神経は生きていたらしく、ピクピクと腕が痙攣している。
それとは反対に、中国兵らの顔は笑みに染まっている。

――ここは、ここは本当に日本なのか…

◇◇◇

２０１１年８月２６日、八月最後の金曜日。
国会、衆議院。そこは、凄まじい喧騒に包まれていた。
再生エネルギー法、補正予算などの相次ぐ強行採決、総理暗殺未遂事件――。猛烈なヤジの中、午後の部が始まった。挙手を議長が了承する。
「内閣総理大臣、菅直人君」
そのヤジがさらに凄まじさを増す。しかし、次の瞬間、そこに沈黙が生まれた。
「本日を以て、私、菅直人は、職を辞し、ここに改めて、この混乱を鎮静化するに、力及ばなかったことをお詫び申し上げます」
一拍
「「「ぅオオオオオオオオオオ――――――――――――――――――――――――――――」」」
歓声と拍手が巻き起こる。しかし、
「そして、その総理としての最後の責務を果たしたく存じます」
再び沈黙。
「かねてより問題となっておりました、防衛省と自衛隊につきまして、憲法第９条に則って、現時刻を以て解散し、その保有する全ての情報を国民の皆様に開示・公開しました」

◇◇◇

「何やて、自分らが解散！？逮捕状が出た？どういうことや…ですか！！？」

自衛隊奈良地方協力本部。その一室に、怒号が響き渡る。

中央からの命令（最早それは命令でもなかったが）に、村田大輔二等空尉は驚きを隠しきれない。

「ほんとにそれ…、どどういうのことなんですか…」

幾度目かになるその問いに相手もウンザリしたような口調で、

『だからぁ、民主党の馬鹿共が、防衛省もろとも自衛隊を解体したんだって。その上俺等を銃刀法違反で隊全てに逮捕状を出した。中継見ただろう？　もう俺たちの兵装や兵力、ありとあらゆる機密情報から隊員の氏名までみんな、世界中のだれでも閲覧することができるんだ、ネットでな。そして北澤防衛相から出た最後の命令が“待機、警察到着を待て”なんだ』

何度聞いても、理解できなかった。納得いかなかった。

――俺等は今まで何のためにいたんや。

――震災であれほどやった報いがこれなんか。

――この国を守りたい、そない思った仕打ちがこれなんか。

「ふざけるなァ！！！」

◇◇◇

『総理は先ほど――』

液晶ＴＶが残酷な事実を淡々と流す。

「なんだって！？」「どういうことこれは！！」

会議室に困惑の怒号が上がる。

「うわっ、これ見てください！！」
若い技師がパソコンを見て驚く。
「なっ、本当だったのか…」
そのディスプレイには、夥しい量の図面が、それはいま、目の前にある図面そのままである。
「心神の設計図が…」
誰かが呟いた。それを皮切りに、
「ああ終わりだ…、もう何もかもおしまいだ…」
「ここにも警察が来る…！」
「いやだ！死にたくない！！」
一気にパニックが広がる。ある者背後に出てゆき、ある者は図面を破りだそうとする。
「落ち着いて下さい！！みなさん！！」
先ほどの技師が声を張り上げる。
「「「「」」」」
一瞬、全てが止まり、そして再び動き出す直前、
「皆さんはそれでいいのですか？」
すぐさま、
「黙れ、そんなことといいわけあるかァ！！　でもなぁ、それでも命あっての物種だ！！」
言葉返し、
「そんなに恐ろしいか！！そんなに、何を恐れるんだ！！」
凄まじい剣幕が場を支配する。
「あなた方に、命を賭してでも、護ろうとする意志はないのか！！」
「世間知らずの若造がキレイゴトたたくな！！」
顔面に衝撃。直後にがく、生暖かいものが口を満たす。
「……っ、わかりました、」
血を呑み込み、
「皆さんがそう仰るのなら、私が全部やります。絶対に心神を完成させてみます！！」

彼らはその言葉の頑固さを知っていた。だから、
「ふん、好きにしたまえ」
そう言うと、足早に去っていった。
それを見届け、
「さあ、負けてられないよ、タカミ！！」
そう言って、散らばった書類を集めだす。
――絶対に、大おじいちゃんの願いを叶えるんだ。中島飛行機を再建する、という夢を。

1．幕開け　ー　01（後書き）

更新は不定期だと思います。
いやぁ、一時の思いつきってのあれですね。

ご一読ありがとございました。

1．幕開け　―　０２（前書き）

お待たせしました。またまた、肩の力を抜いてお楽しみください。

1．幕開け　―　02

混迷の翌日、27日。
報道各紙はと言うと――。
『――憲法の死守、総理最後の英断――』（朝日・一面）
『――長年のしこり取れた。日本は本当の平和先進国へ――』（読売・社評）
『――技術か、平和か、日本最大の選択――』（毎日・一面）
『――技術敗戦国へ――日本の産業が滅ぶ！？――』（日経・一、二面）

この発表に個人の権利などは無視され、ただただ武装の放棄という点で評価される言葉の羅列が重なる。

そんな中、
『――憲法の曲解、国民の安全保障放棄。日本滅亡の危機、立ち上がれ国民！』

ただひとつ、反旗翻す報道あり。

◇◇◇

「はなせ、はなせつってんやろがぃ！！」
航空自衛隊二等空尉、村田は最後の抵抗に出た。
「テメェら、俺らおらんようなったらだれが国守る思とんねん！誰もおらんねんぞ、それわかっとんのか！！」
だが県警は警帽を目深にかぶり、言葉一つ発さない。
「オイコラなんか言…」
ふと押し黙った。

笑っている。そう、警官が笑っているのだ。
見れば前方から拘束された自衛官がもう一人連れて来られた。
「――っあっ、離せっ、放せぇッ」
「い、石田！？」
石田は訓練生時代からの後輩で俺にとってはもう弟のようなものだ。その分腕も確かである。
「あ、兄（あに）さん、っ、ぐふっ」
道路に血だまりができる。顔にはいくつも銃床で殴られた跡があった。
「おまっ、手前ら、こちとら一応人間やぞ！！」
向き直って怒鳴る。
だがそれには答えず、一段と笑みが深まるように見えた。

――銃声

「――――ッ！？！」

――――血だまりに、

「うわあああああああああああああああ石田ああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

――――首が。ごろり。

「イシダぁぁぁぁぁぁぁ！！のヤロぉぉぉぉぉぉ！！」
目下の深紅が、航空服にまで紅色に染めていく。
「おおおおおおおお――――――――――」
全身に有りっ丈の力を振り絞る。
「うぐぁッ！？」
後頭部に凄まじい衝撃。前のめりになった瞬間、目前に、

「ッがっ、」
鼻がヘシ折られ、盛大に血飛沫が飛び散る。
次々に体に打ち込まれる拳と蹴り。

しばらくして抵抗を諦めてだらりとなった俺に、
「！！？！？！？」
口に何か入れられた。銃口ではない。丸い？　でも銃弾ではない。
「ペッ、ゲホっ、ペペッ」
血反吐とともに吐き出されたそれは、

———眼球

石田の。

「うわぁぁぁっぁぁぁっぁ———、がっ」
顔面を思い切り地面に押しつけられた。這い蹲るような格好で見上げてみれば、
(笑ってやがる、愉しんでやがるやと…)
歪んでるのか、そう思えるぐらいに弧を打つ口形。
この表情を愉しんでいるのか、彼らは何もせずにいる。

しばらくして、三台のトラックが止まった。

背を小突かれる。これに乗れということだろうか。
(抵抗しても無駄や…)
そう思った俺は血まみれの体を立ち上がれせて背後を振り返った。
「！！！」
遊んでいる。石田の首を、ボールにして。

ふづっ、

俺の中で何かが千切れた。
「ワレ何しとんのじゃゴラぁぁぁぁ！！！」
体が熱くなった。渾身の、とでは言い表せぬ凄まじい力が体中を駆け巡った。
左右の警官を振り切ると、手錠を引き千切った。
「おらァ――――――――ッ！！」
体を沈めて二人の殴りを避けるとそのまま足をさらう。
もんどりうって倒れる彼らにさらに蹴りを一発くらわせてノックダウンさせると、発進しようとし出すトラックの運転席に飛び込んで運転手の頭をかち割った。
すぐさま後部扉を開放する。
「お前ら大丈夫か！？」
「「「はい何とかぁ！」」」
返事とともに飛び降りて敬礼する3人。
部隊では副隊長を担っていた岩崎、辰巳、永谷の一等空曹三人である。
「よし、状況は把かっとるな。トラックを解放する、行けっ！！」
冷静さを取り戻して部下に命令すると、
「さて、年貢の納め時や」
背後に立ちつくすもう一人に向き直ってそう言い放つ。
「な、わかったか？」
そいつは歯ぎしりをして、
「…っ、…っ来るなァ、ぁ！？」
銃を構えるも、石田の体に蹴躓いてこける。
そんな震える銃をはたき落とすと反対に俺は手銃を構え、
「誰が当たってええつった？」
その頭蓋を打ち抜いた。

形を保たなくなるまで。

「やるぞお前ら、覚悟はええな」

完全制圧の報告をしに来た三人に俺はそう告げる。

◇◇◇

「はぁ…、はぁ…、」

息も絶え絶え、一心不乱に品川駅に車を走らせる。

『――、政府は先ほど非常事態宣言を発令し、事態の収束に当たるとともに――…』

車載ラヂオは不穏なことを告げてくる。

今の私に戒厳令の法整備の有無を疑う余地はない。

予約していたホテルはすでに“自称”警察によって抑えられていて、昨日は車内で寝た。

駅に着く。普段律義な彼女でも、この時は違った。バス停に車を乗り捨てると、新幹線の切符を買い求める。

スマホでツイッターを見てみると、東京駅や成田・羽田空港ではすで検閲が始まっているらしい。辺りを見回しても今のところそのようなものは見当たらない。

（ありがとう、大おじいちゃん…）

内心で自身の幸運をそう感謝すると、切符を買う。

向かうのは京都。そこには生前の父の友人宅がある。

いつも以上と思われる喧騒し混雑する人ごみの中、逃げるように走ってホームに出た。

「はぁぁ~~」

ホームに出れたことへの安堵のせいか、膝がガクガク笑い始めた。

『ツキガセタカミ様。――ツキガセタカミ様、至急事務室へお越しください』

背筋が凍った。

乗り捨てた車が故ではない。断言できる。確かにあの車はレンタカーだが偽名で借りている。なにか落としたのならそれはちゃんとその旨が述べられる。

スマホを再び見れば、品川でもついさっき検閲が入ったことがツイートされていた。

心臓が高鳴る。みるみる血の気がなくなってゆくのが分る。

「？」

直後、周囲のざわめきが消えてゆく。人々は動きが止め、そちらを凝視している。怖くてそちらに視線を上げる気になれない。いやな予感しかしない。

異様な沈黙の中、新幹線が入ってくる。

カツカツと迫る靴音。

何かの呪縛にかかったように全員が動かなかった。

発車の予鈴に咄嗟に体が反応した。私は車内に飛び込んだ。

◇◇◇

『〔視点〕政府は、日本国憲法発行以来初めて東京に戒厳令を発令した。安保闘争や大学紛争など、機動隊の出動や大学臨時措置法の制定などで事態の鎮静化を図りその発令はついにないと思われていた矢先の出来事である。その主たる理由は自衛隊・それらに関連す

る施設団体の早急な逮捕としている。しかし、これは現時点では法律で逮捕する罪状、銃刀法には抵触しておらず、その行動は法治主義への逆行と言ってもいい。また、些か早急すぎる今回の発令は検察・裁判所もさることながら、交通規制に伴う経済の停滞・ライフラインへの多大なる影響を与えている。また、今回に一斉検挙にははなはだ疑問が多い。まず、全ての裁判所が逮捕状を書いたのだろうか？それは自衛隊に賛成して、多くを抱える北海道や神奈川県もが逮捕状を発行したことから疑える。もしこの間に何らかの外圧が加わったなら、さらにそれが政府であるならば、憲法の根幹である三権分立の概念を揺るがしかねない。』

「ほい、お疲れさん」

キーボードの脇にコーヒーが置かれる。

「あっ、編集長。ありがとうございます」

髭をボサボサに蓄えた精悍な顔つきの中年男が横に座っている。佐藤　太（ハジメ）編集長だ。相変わらず暢気で、この人だけ流れている時間が違うんじゃないかと思う。彼は自らもコーヒーをすすりながら、

「あんまり無理はするなよ。お前、これで何回徹夜やってるんだ。若気の至りとはいえ、そろそろ仮眠したほうがいい」

編集長にとって唯一記者をねぎらう方法なんだろう。だが、

「いいんです。やらせてください」

「しかしだな…、こっちにも労働基準法とやらがあってだなぁ…」

頭をかいて弱り切った声をあげられる。

「お前も女なんだし、男の俺が言うのもなんだがちったぁ体を気遣え。な？」

「それは――」

差別です！そう言おうとした時、

「動くなぁッ！！　人民治安維持隊（……）だ。全員その場で手を挙げろォ！！」

「貴様等を、国家転覆・国民思想煽動禁止法違反で逮捕する」

1．幕開け　ー　02（後書き）

次回、『2．それぞれの闘志ー　A』乞う御期待！

2．それぞれの闘志　―　A　新聞記者・沼田ヒヨリの場合（前書き）

おおお！？まさかたった2週間で247ユニーク！！？　読者のみなさん、ありがとうございますっ。

2．それぞれの闘志　―　A　新聞記者・沼田ヒヨリの場合

真暗な部屋。

地下室らしい独特の湿気。

血の匂い、木霊す悲鳴。

看守の笑い声、鞭の弾ける音。

もう周囲を見やる気力も、仲間を心配する余裕もない。私は、わた　しは…、ワ　タシ　ハ　……

◇◇◇

「……人民治安維持隊！？」

私はそう叫んだ。全く見たことも聞いたこともない組織。そしてすぐさま、書き留めようとした、記者魂がそうしようとした。

「動くなと言っただろう！！」

銃弾が足元で爆ぜた。

「…っ！」

数瞬の沈黙

「あんたらいったい何モンだ」

編集長が至極当然な、しかしどこかオドケタ声で聞いた。

「我々は我々だ。それ以上でも以下でもない。陛下の仰せのまま、貴様ら不安定分子を排除するのが仕事だ」

「ここは法治国家だ。言論の自由は保障されているんだぞ？　今さ――」

そこから続きが発せられることはなかった。

「そんな戯言をほざくのを、不安定分子というのだよ」
声にならない悲鳴があちこちで上がる。徐々に武装した“何もの”かが入って来、同じく私たちは後ずさった。黒地に赤のラインと黄色の星。防護盾が視界を占め出していく中、ちらりと、
「―…青少年…わしょう治安…維持隊…」
“倭省”そう記していた。

「嘘だ！！」

二つ隣にいた男性記者が絶叫した。
「今上陛下が…そんな…、明仁殿下がそんなこと認めるわけがない！！」
そして、ぶわりと殺気を発すると、
「殿下の逆賊とはお前らのことだぁああ――――！！」
何も持たず、拳一つで、身ひとつで飛びかかった。
瞬く間に射殺され、その骸は無残にも踏み躙られる。そのおぞましさと彼らの狂気で吐き気が襲う。
堪え切れずに膝をつく。しかし事態は待ってくれはしなかった。
「ふう、血の気が多い奴だ。それとも、ここ全員がこんな奴らなのか？」
「みたいだな。皆殺しにしようぜ、こんな奴ら」
「確かにな。こんな陛下への敬意も身の程もわきまえないムシケラ共等」
この場の空気に一寸でも歓喜の感情が混ざったことを察知する。
突破するなら今だ。何を武器に？いや、万年筆がある。手に掴んでいたそれを刺突するために持ち直すと、
「おいそこの女」

空白

「下手するな。死にたいか？　大丈夫、悪くはしないからよ」
…今もし、わたしが突撃して殺されてしまえば。わたしは死んで楽になる。でも残された皆は？　私はただ殺されるの？
――いやだ。
そう思い直して顔を上げると、手を挙げた。
驚きに両者が沈黙する中私は同僚に、
「降参しましょう。私たちは記者、真実を世論に伝えるまで、死ねないわ」
そう言うとそのまま歩きだした。背後でみなそれに倣ったことが分かった。

◇◇◇

手錠を嵌められ、目隠しをされて護送車に乗せられた。鮨詰のその中を、何時間、何日そうしていかわからない。

◇◇◇

次に正気を取り戻したとき、わたしは尋問（取調）室にいた。左右には同僚の女性記者もいる。向かいに座ってるのは婦警らしい。何か問うてくるが、それ以上に疲労が体を襲い、うつむいて答えられない。
チクリッ
「？」
腕に痛み。直後、ふんわり温かいものが体を巡る。栄養剤？　ゆ

っくりと顔を上げる。けど手足を動かせる力はなく、喋ることもできない。顔を上げたまま喋らずじっとしていると突然、婦警の表情が豹変した。

「――白剤打ってやったんだろが、答えろや――」

平手。じんわりと後から痛みが伝わってくる。

それでもしゃべれず、黙ったままでいた。

「――もういい」

休めるのか？

「連れて行け、好きにしていいぞ」

？？

ぬっ、とどこから来たのか、いつの間にか男らが囲むように立っていた。

「へへっ、――――…」

「……――――」

「――――」

「、――」

「…」

何やら話すと、いきなり腕を掴んで。

その時初めて彼らが何をしようと悟った。しかし時はすでに遅し。

「きゃ、やめ――」

この日初めて悲鳴を上げた。

◇◇◇

「　　」

暴虐の限りを尽くされ、正気はすでになく。

「　　」

口から発せられる歩は意味不明な、

「　　」

そして卑猥な言葉の羅列。

もう仲間は皆死んだのだろうか？しかしそんな疑問の答えを探すこともせず、

「　　」

垂れ流し続ける。

彼女の周りにはいくつもの血痕と注射器、そして体液が散らばる。既に日付感覚は失せている。ここへ来て幾日になるか、彼女が知る由もない。

「ひぐっ」

突然呼び起された正気が、この現状を理解した時。強烈な恐怖感が、絶望感が襲ってきた。

手足を縛る紐。口には猿轡か何かがかまされ、息ができない。

真暗な部屋の中、寒気に身をよじる。そして気付く。この違和感は？　この下腹部の違和感は？

「――――――――――！！！！」

しかしその絶叫が言葉として発せられない。そして残忍なことにこの現実に目を背けるように正気が失せていく。

爆発音

けたたましいサイレン音。あちこちで上がる叫び声。銃声。
『――い、』
『どこッ――、こっ―』
『いそ――、そこや――』
『うて――、て――、てぇ―』
『わ――、てき――、にげ――』

騒動に正気が再び呼びもどされるも、もうどうでもよかった。

衝撃

「！！？」
今のはただ事ではない。隣室で起こっていたあの衝撃ではない。

『だれか――、誰か――』
『こっちはいない――、そっちは――』
『今探してる――、こちら自衛隊――、誰か――』
『自衛隊だ――、味方だ――。生存者は――』

「――！！――――っ！！！」
叫ぼうとするが、口が塞がれていて声にならない。幾度か試して、それも諦めた。その時、

「おい、ここ閉まっとるぞ」
「ほんまや隊長」
「いくぞ」
「はい」
バン！！

視界にまごうことなき自衛隊のマークを見て、わたしは安心して気を失った。

「おいあんちゃん大丈――」

「うわぁ…なんだここ」

「それよかはよ着るもん持ってこい――！」

2．それぞれの闘志　―　A　新聞記者・沼田ヒヨリの場合（後書き）

読み返してみれば朝から読むものではないなこれ…。すいません。

あと次から土曜２１時頃もしくは日曜９時頃に投稿していきます。

よろしくです。

ではまた次回で会いませう。

2．それぞれの闘志　―　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（上）（前書き）

すいません…、遅くなりました。それでは、お楽しみ下さい。

2．それぞれの闘志　ー　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（上）

「関西広域統合自衛隊（K.I.D.）に連絡は？」
「もう行いました。回答待ちです」
歩きながら問う。
関西広域統合自衛隊（K.I.D.）とは、東日本大震災の発生によって大阪府から提唱された「関西広域防災組織案」の一つで、救助活動が終了した先月から開始された擬似組織である。もちろん有事の際に指揮系統が麻痺する中迅速かつ柔軟に対応できるようにするためであるが、あくまで組織として国家から許可はなく、関西広域連合に加盟している府県内の陸海空全ての自衛隊が『自主的』に持った繋がりの様なものだ。一般に知られていることもなく、注目する者もないが、自衛隊内では勝手が違ってかなり重要視されている。

「はぁぁ…」
指揮所に入り、椅子に腰かけると俺は大きくため息をついた。
「…少し、一人にしてくれ」
隊員らは素直に出ていく。出ていく間際、隊員らの休息も命じておく。
「……。」
参ったな…。そう思いながらぐぃと背伸びをしてみるが、気持ちは晴れない。

三日前やってきた“自称”奈良県警。俺はそのひとりを殺した。あの時の俺には明らかな殺意があった。明言する。だがもし裁判でそれが問われれば、罪を逃れることはできない。
今になってそれが急に恐ろしくなってきた。それだけでない、あの時見た石田の眼球、殺した人間の破裂した頭蓋。それらが鮮明な映像となって俺を襲う。嘔吐感が、口腔を胃液で満たそうとする。

それを何とか抑えると、首を振る。これからの事を考えよう。
残った奴らは皆拘束して眠らせ、１０人がかりで見張らせている。昨日のうちに奈良県警に問い合わせてみれば、そのような出動は一切していないということだった。直接顔見知りの奴にも確認を取ったから、間違いない。
―――じゃあいつらは何者だ？
「やっ、いかんいかん」
また首を振ると、これからの事を考えるようにする。
Ｋ．Ｉ．Ｄ．（キッド）は俺たちの要請に応えてくれるだろうか。確率は五分五分だ。向こうが政府側に従ってしまえば、俺たちの抵抗は水泡に帰してしまう。
―――だがそんなことはさせるか。
「そう、絶対に！！」
俺は低く呟くと、指揮所を後にした。束の間の休息、ゆっくり休もう。

◇◇◇

ＰＸを通り過ぎて俺は自室へ戻った。なぜか奴らと一緒には居れないと思った。
ばたん、とドアが閉まりきると、全身の力が抜けていくようだった。そのままベッドに倒れこむ。眠いわけではない。
机には父と母との写真が色褪せて飾ってある。

◇◇◇

父が死んだ。俺が１７のときに。母は俺を生んで死んだらしい。
――あっけなかった

父は自衛官だった。航空自衛官で今の俺より低い三等空尉だった。F―2のパイロットで、熊の様な体つきをして、それでいて笑顔がどこか人懐っこいのだ。

――格好は決して良くなかった

事有るごとに上司と喧嘩して飲んだくれた。酒癖もよくはなかった。

それでいて剣道が得意で、武士道がどうとか言って厳しかった。礼儀作法には特に厳しくて、ちょっとでも粗相をすると竹刀で叩かれた。でも自分の腹いせで、俺を殴ったのはたぶんなかったと思う。

――せやけど、温かかった

嫌なことも嬉しいことも、いつも笑い飛ばしていた。

決して甘やかしてもらったことはなかった。何か欲しいと言えば『自分で作ってみぃや』と言われた。俺自身も、自衛官の風当たりが悪く、給料がどんどん減らされているから、おとなしく従っていた。て言うか、逆にそれで電子工作が得意になったほどだ。

――そんな親父が死んだ

模試で志望校にA判定が出て、踊るようにして帰ってきたとき、玄関前にパトカーが止まっていた。

――原因は、酔っぱらいの集団に襲われ、リンチを受けたからだった

病院へ駆けつけると、無惨に体のあちこちに腫れと刺し傷を付けられいて、最初は父とは思えなかった。

あの日父は仕事で京都大学に出向いていた。そして襲われた、京大生に。

今考えれば、左翼の多い京都の、その総本山とも言われた京都大学へ、自衛官が向かうのは無謀極まりないことであった。

裁判の日、被告らはこうほざいた。

『憲法9条を守らない奴らの方が悪いんだ！！』『平和・民主主義

を守らない国賊を誅殺したまで』

◇◇◇

あの時ほど怒りを覚えたことはなかった。

――そして俺は自衛官になった

怒りに任せて、ただ我武者羅に自衛官への道を突き進んだ。普通の人間なら、この事件の再発を恐れて、自衛官など聞きたくもなくなるだろうが、俺は違った。

――『器のでっかい人間になれよ』『護るもんはな、多い方がええんやで』『お前頭ええんやから、よう考えろ』

小さい頃からずっと言われたこと。でも、同じ目に遭うことを恐れた親族が技術者になるよう勧めた時ふと、

「大丈夫、度胸と根性と性根は俺譲りやから心配すんな」

遺影がそう言って笑っているように見えた。

――だから俺は今ここにいる

あの時の怒りと共に。

◇◇◇

ドアが大きく叩かれた。どうやら寝てしまったらしい。

◇◇◇

「おお、これはこれは…」

応接室へ行ってみると、そこには迷彩服を着込んだ壮年の男がい

た。陸上自衛隊、否。“元”だ。
「やあ、お久しぶりだね、村田二尉」
「お久しぶり、ってわけでもないでしょう吉岡二等陸佐」
彼は計画中の陸上自衛隊一奈良五條駐屯地の現地視察に来ていたのだ。先に2回ほど会っており、予てからの知り合いである。
「まあいいじゃないか。それよか豪い事になったねぇ、ここいらは大丈夫だったのかい？」
自慢の髭を撫でながら聞いてくいる。
「……」
瞬間、この事を言うか、迷う。この沈黙を否定ととらえたのか、彼は
「いやぁ、こっちは大変でねぇ、今回は俺の隊共々３０人で行ったんだけどさぁ、現地視察してたら突然警察騙るバカが『逮捕する』って来てねぇ」
「はぁ…、」
「奴らなんか大層なトラック出来てなぁ、それまた、武装してやがんのよ。いきなり撃ちながら入ってくるもんだから。そいでもって俺は終(しま)ったと思ったんだ」
返事が返し辛い。相槌で受け流す。
「ところがどっこい、ここはさすがこの俺。前の日のマラソンでビリだった１０人にペナルティで銃器フルで担がせて来てたんだ」
それで応戦したと言うのかこの人は。
「それでみぃ~んな撃ち落としてきたんだ」
常時にこんなことをすれば裁判行き間違いなしである。
「そうだったんですか…、実はこちらでも――」
案の定の答えに、俺はこの隊で起きたことを話し出した。
「――、そうか…、その顔の傷はそれやったんか…、しかしなぁ…、連中もえげつないなぁ…」
話を聞き終わった後、吉岡2等陸佐は、そう言って気付かなかっ

たことを謝罪した。
「ですがどうやらこの件で県警は動いてないらしいんですよ」
俺はそう報告する。すると、
「みたいやな。終わった後真っ先に怒鳴りこんだら縮みあがって否定しとったわ」
やはりそうか。
「うちらはみんな撃ち殺してしもたけど？」
「こっちは、一部だけで残り３０人ほどは眠らせています」
そうか、まあ、起こして尋問でもするんか？　という問いに、まだわからないと答えてから、
「そう言えば、二佐の部隊員は？」
「ああ、周囲で同じようなトラックが走ってないか調べてるよ。県警も血眼になって捜してるけれど…」
「ねぇ…」
日本の警察がどれほどザルかは世界でも有名だ。

『ヴー、こちらマッドシックス、目標は阪奈第二を走行中。指示乞う』

「「来たか！」」
思わず立ち上がる。
「こちらマッドエイティ、目標の進路は？」

『ヴー、こちらマッドイレブン、目標は…、えー目標は阪奈第二を降りて…、ジグザグ…に移動中…、あ、今目視にて確認、和歌山方面に向かっています。追跡許可を、』

「こちらマッドエイティ、公用車を使え、許可する」
陸佐が無線にを切って向き直る。
「行きましょうか」

「はい」

2．それぞれの闘志　ー　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（上）（後書き）

長くなったので分割します。下の方も近日上げるよう頑張ります。

もうご存知の方も多いでしょうが、同じ戦記ジャンルで投稿させていただいている『蒼空へ、いま、閃光を　ー第７７６航空隊物語ー』と、自身の都合から交互に投稿していこうと思っています。なるべく毎週投稿するようにしますが…、どうかご容赦ください。楽しみにしていただいてる読者様、申し訳ありやせんっ。

『蒼空へ、いま、閃光を　ー第７７６航空隊物語ー』はまだ序章までしか投稿で来ておりませんが、よろしければそちらもご覧ください。こちらもよろしくです。

2．それぞれの闘志　―　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（下）（前書き）

お待たせしました…、長いですが、よろしくです。

2．それぞれの闘志　ー　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（下）

自分では意識ないが、足が速まっている。半ば地面を蹴るようにして駐車場へ向かう。
あと少し、そうやってさらに足を速めて――
「待ってください！」
いきなり道を塞がれた。
「…、何や辰巳、どいてくれや」
辰巳はこの基地数少ない女性航空自衛官（WAF）だ。自衛官としての才能も1級レベルで、その上容姿には定評があり、憧れる自衛官も多いらしい。
「……、。」
その辰巳が、小柄な体躯をいっぱいに広げて仁王立ちしている。
「一体何の真似やねん」
一言も発しないに彼女に苛立ちながら聞く。
「…本当に解ってないのですか？」
驚愕の表情が浮かぶ。直後、
「ダイスケさん、現在のここの責任者でしょう？」
「ああそうや」
その通りなので即答。辰巳の方は一瞬呆れたようにして
「それが責任者の態度ですか！」
「…？」
「ダイスケさんここの責任者なんですよ！？私たち自衛官72人の命を預かってるでしょう！？」
ますます何が言いたいのかわからない。
「…、当たり前のことやないか、せやから俺は行くんや。わかったらどいてくれ」
押しのけようとするが、彼女（こいつ）の腕力も並じゃない。
「どうしてそうなるんですか！！」

その声は悲鳴に近かった。俺は、
「どうしても何も、そのために行くんや。俺は――」
「そう言うことじゃないでしょう！！？あなたはここの責任者なんですよ！？どうしてここに居て部下に指示しようとしないんですか！？」
半泣きになってそう訴える。さらに追い打ちをかけるように、
「そんなに私たちを信じられませんか！？どうして一人でやろうとしてるんですか！――それでもあなたは自衛官なんですか！？」
最後の言葉に、俺の逆鱗は触れた。
「あのなぁ…、さっきから責任責任て、お前なんやねん」
泣き面を上げさせて睨む。そして、全員に聞こえるような怒声で、
「いいかお前らァ！　４日前を以て俺たちは自衛隊じゃない。単なる一般人や！！」
左腰の刀を握りしめる。
「何度でも言うぞ！　お前らはもう自衛官やない！！　お前らに守秘義務もなけりゃ従う義務もない！　何をするのもお前らの勝手やし、俺の預かるところやあらへんねん！　ええか！！！」
力無くへこたれる辰巳を押しのけて駐車場に向かう。
「なら――」
吐き捨てるような、哀願するような声。
「なら、何でダイスケさんは、そんなにまでするんですか……？」
「国護る為に決まっとる」
「だったら私達も――」
「来るな」
そう言い放つ。
「人殺しは俺だけで十分や」
柄に手を掛ける。
「お前らが犯罪者になることあらへん。俺は皆護るためならどんな腐ったことでもするけど、お前らはアカン」
そうだ、俺には家族も遺産も、もう何も残っていない。在るのは

親に貰ったこの手足だけ。
しかし彼らは違う。守る親兄弟が、友人が、信念が、ある。それを自分の勝手で血に濡らしてはいかん。もう今の自分に彼らに命令できる権利もない。ただそんな彼らを、この手で守ってやることしか出来ないんだ。
「何を――」
「手前ぇらはじっとしといたらいいんや」
すがりつく彼女の手を払って、背けるようにして会議室へ。
「――」
何か言っていたようだが、もう俺の耳には入らなかった。

◇◇◇

「では、詳細を確認する」
吉岡二佐の凍てついた声が会議室に集まった有志２７人にかかる。
彼らは防弾チョッキ２型に８９式５．５６ｍｍ小銃（携行銃弾６０発）１丁に９ｍｍ拳銃に２丁、中には加えて爆薬を装備している者もいる。ただ、村田だけは航空自衛官なので、彼らと異なる防弾チョッキと９ｍｍ機関拳銃と１２．７ｍｍ重機関銃Ｍ２を携行し、そして左腰には黒い漆塗りの刀が一振り、下げられていた。

「我々の目的は偽装警察、以下黒警の関西圏における完全制圧。その第一歩として、」
一拍。
「これを叩く」
続けて、先の情報によれば、
「黒警は県境の廃ホテルに潜伏している。道はまだ残っているが、周囲は土砂崩れによる絶壁や、沼が存在する模様」
地形説明、
「勢力は不明だが、警察以上、我々と同程度の武装をしているのは

周知の通りだ」
　続く、
「ただ黒警は、２０人規模の部隊を組んでいる。あの黒いトラックは鋼板で防弾化しているはずだ。我々の装備ではまず撃破は叶わないだろう」
　絶望的宣告、
「内部潜伏も合わせて１００人近い武装勢力がいることになる。また、民衆を人質に取っている可能性も否定できん。それに我々は二十人強で挑む。数の上で圧倒的に不利な上に、武装は互角なのだ」
　加えて、
「我々のこの兵力では分散攻撃は意味を成さない。さらに地形上、正面から進攻することしかできん。だから、今回のチャンスは全て初撃にかかっていることを理解しといて貰いたい」
　圧倒的兵力差、地形に伴う隠密行動の不可能。それでも彼らはこの作戦の遂行を諦めようとは思わない。己が信念を貫かんとするがために。
「生きて帰れる見込みはないと思えよ。辞退する者は今のうちに申告――って、それはないな」
　そのつもりで来てるもんな、そう付け加えられる。
「以上、質問は？　――無いな。各自乗車開始！！」

◇◇◇

「「「「「……！？」」」」」
　駐車場に出た俺達は言葉を失っていた。
　空挺迷彩服２型に体を包み、両腰に９ｍｍ機関拳銃、右手に９１式携帯地対空誘導弾と１２．７ｍｍ重機関銃Ｍ２を担ぐ航空自衛官らがいた。
　何をしとるんや！と怒鳴る前に、
「村田隊長！！」

泣いて充血した眼をした辰巳が怒鳴り、思わず後ずさった。
「おま――――、」
「私たち旧奈良地方協力隊航空自衛官一同はァ！！」
女の声とは思えない大きさと野太さに一瞬皆が手を止めて、
「我が良心に則って、国民の生命を脅かす全てを排撃するためにィィ！！」
最敬礼。
「村田隊長に随伴し、敵排撃に加担する許可を願います！！！」
「…」
絶句。しかし、ここで断っても動じない瞳を彼らはしていた。
凄まじい覇気と怒りと、感じさせる瞳だった。
「好きにせえや」
どうなっても知らん、そう吐き捨てて俺はバンに乗り込んだ。
背後からは歓喜の声が上がった。

◇◇◇

鬱蒼と茂る木々に、罅だらけのアスファルトが横たわる。
あまりの樹の密集度で薄暗く、ホテルもここからはわずかしか見えない。
ホテルの看板だろうか、朽ち果てて文字は見えない。通行止の柵が開けられ、重みに耐えかねた道路は凹んだ轍を残している。
「ここから約１００メートル程して、そこで右に２００メートルのところです」
先に潜伏していた陸自隊員が囁く。
「ホテルの見取図です」
門を入って正面に玄関口、その両側に小さい駐車場がある。ホテル自体はコの字型のコンクリ三階建て。地下も一階。
「その地下は避難通路があって、出口がここ、比較的緩やかな丘のところに鉄製の門がありました。自分が確認したところ、防空壕の

跡を転用したものらしいです」
地図を指差される。
「開いてるのか？」
「はい、蔦や錆を取り払い、現在開けています」
よし。こいつはいい。
「吉岡さん」
俺は向き直って、
「やっぱり二手に分かれよう。俺たちは正門の方から突撃して引きつける。吉岡さんは地下門から背後を突いてくれ」
「駄目だ駄目だ、陽動は俺達がやる」
「これまたどうして」
「俺達は昨日おとついの戦闘で炸薬もないし、体力もない」
どうせお前の事だから、俺には迷惑かけねぇつもりなんだろ、と言われて肯定。
「やっぱりな、何でもかんでも抱え込んだら身潰される。止めとけやめとけ。それに、装備もお前らの方がええしな」
「けど――、」
「なんやお前は、この老体に鞭打つってか？」
向けられた若干非難の眼差しに窮しているうちに、
「お前らもそれでええよな。よし決まった」
「行きましょう。隊長、」
辰巳や岩崎らも賛成している。
「…わかった、悩むのは勝った後や」
俺は撃鉄を起こした。

◇◇◇

「……ええな」
一同が頷く。
抉じ開けられた鉄門のさらに奥に鉄の門があった。９１式携帯地

対空誘導弾の弾丸を分解して火薬を蒔き、そこに手榴弾を投げ込んで誘爆させる方法がとられた。
（これで失敗すりゃ、皆終わってしまう…）
そんな懸念が急に不安を駆り立て、安全弁が抜けない。手に力が入らない。冷や汗が背中を流れ、怖気が加速する。
「……何してるんですか、隊長…」
部下からの声が悪魔の宣告のように聞こえる。引き返して、吉岡二佐ともに中央からっ突撃するか…、そんな邪念がよぎった。

っごぉおおおん――――

（吉岡さんが…、突撃した…？）
「ええくそ！！」
最後まで憑き纏う邪念を吹き飛ばすように、俺は手榴弾を投げ込んだ。

一瞬で閃光が広がり、

ッゴオオオオンッッ――――

「突撃――――――ッ！！」
絶叫して、俺は炎の向こうへ飛び込んだ。

◇◇◇

「っぁッ、――なんやここは！？」
無数の部屋があった、鉄格子と、黒い扉の。丸で刑務所だ、そう思い絶句していると、
「いたぞ！侵入者だぁ――――」

あの黒警が、いた。
咄嗟の勘で向こうの射撃をよけて、すぐ隣のドアに飛び込んだ。
「！！！」
ぼたっ
べちょ
ぼたた
――そこに、無残な、女の、生きていない、裸体が、あった。
「隊長、大じょ――、。」
岩崎が入って来て絶句した。
――生温かい四肢
――引き裂かれた腑（はらわた）
――辺りに散ばる体液
――縄でぐるぐると縛られた裸体
――打ち砕かれ、脳髄液が垂れ流れる顔面
「「　　」」

――これ、さっきまで生きてたんとちゃうの
――なんでこんなことになっとんねん
――散々にしおって、なんやねん
――女になんてコトするんや
――ふざけんな、
――石田
瞬間、あの光景がフラッシュバックする。
「あああああぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁっぁっぁっぁぁ――――――――――――――――！！！！！！」
目を覆って絶叫。
そして、
「ちぃッくしょおおおっおおお――――――――――――――――！！！！！」
◇◇◇
俺は部屋から躍り出た。
「ぅあああああぁぁぁぁぁぁぁっぁぁ――――――――――――！！！！！」
見境なく機関銃を撃ち放つ。
「おらおらおらおオラァァァッ！！」

狂ったように叫び、黒い制服に銃弾をたたきこむ。
「何してやがる、ブチかませェ！！」
後方で唖然としている部下を怒鳴り、黒警の防衛線に突っ込む。

ヒュンッ

――手榴弾！

「オラァッ」

カーン

機関銃でそれを打ち返し、クリーンヒット。

「対空弾、撃ちこめぇっ！」

紅蓮が辺りを包む。

「何ボサッっとしてがる！！」
弾装を交換しながら指示。
「岩崎、永谷！上へあがれ、奴らを挟み撃ちにして来い！」
「「は！」」
「それから辰巳！」
銃剣で串座しにして、
「お前は反対側から叩きのめせ！」
「は、はいッ！」
間髪入れずに機銃をぶちかます。
しかし敵は尽きない。わらわらとムシケラが如く増え、蠢き襲ってくる。
「クソッタレがぁぁぁぁ！！」

カチンッ

――しもた、。

弾丸が、切れた。

「隊長、前っ！！」

鈍器片手に襲い来る、

一閃。

「　」

襲いかかってきた黒警が音もなく崩れる。

「うん、やっぱこれや」

「たい、ちょう…？」

一瞬で何が起きたか周囲はわかってないようだ。

「これやこれ、」

そいつらに、ギラリと光る刀を振りかざす。

「さぁコイヤァ！！！」

階を揺るがす大声で叫ぶ。

「ヒ、ヒィィ……」

今の一喝に向こうは恐れをなし、一人は腰を抜かして斬られ、また一人は撃とうとして手が震えて斬られ、最後の一言も言わせぬ勢いで斬倒した。

「「「　」」」

斬る。
斬り殺す。
叩き斬る。
斬って斬って斬り伏せる。

「　」
もう怒りも悲しみもない。動くものは斬る。何であろうと構わない。斬る、切る、キル。
…
……、
……。
いつしか怒声は消え、焔はただただ火薬が生み出す肉を焦がす臭いで覆われていた。みるみるうちに骸は焔に包まれ、その中で赤く膨らんでは破裂していく。
辺りにもう生きている敵がいない。
「辰巳、」
「は、はぃ！」
辰巳を呼ぶ。そして、
「生存者探すぞ。手すきの者は来い」
消火栓を手に取った。

◇◇◇

「……たぶん、もう生存者はいないと思いますよ」
岩崎と永谷が申し訳なさそうにして言った。
「これだけ派手にやったんですし、それにこの辺りでは既に凌辱されて殺されいます」
「それらの遺体を見てれば、かなりの虐待を受けていたらしく、衰弱した者も多く見受けられます」

「……」

「で、ですからっ…」

「もういい」

永谷の声を遮る。

「言い訳はしてから言うんや、予想だけして逃げるのはボンクラのやることや」

あっという間に火を消して蒸発していく水の、湿気の高さが、その重苦しさが４人の肩に圧し掛かる。

「居らん言うんやったら、意地でも見つけるまで。ここでこんなアホな問答してられん」

消火ボンベを担ぎ直す。

「来るんやったら来い。上では陸自や同僚がやってくれとんのや。助けるもんは何でも等しく助けんのが俺らやろが。そんな事も忘れとるんやったら帰れ」

くるりと踵は返され、その姿は角に消えていく。

「あ、待って下さい、私も行きますっ」

辰巳が駆けだす。

「「俺達も！」」

残りの２人も駈け出す。

◇◇◇

「こちらは自衛隊です、どなたかおりませんか――ッ！！」

「敵勢力は鎮圧されました！！この場所は自衛隊が確保しました、」

「繰り返します、敵は鎮圧されました、皆さんの救助に参りました！」

「誰か、誰かいませんか、出来るようなら返事を――」

消火液を撒きながら駆け廻る。

（ちきしょう、こんなことなら犬連れてくるんやった）
村田は毒づきながら炎を消してゆく。他の3人も同じことを考えながら、辰巳は生死のチェックを、岩崎はそれを道の際に寄せ、永谷は部屋の中をチェックして行く。

「はぁ、はぁ…、見つからへんなぁ…」
一周して息をつく。
「お前ら、誰でもええから、　、上見て来てくれ」
5分ほど前から銃声がやんだのだ。それが勝利か、全滅か、確かめさせる。
俺はまだ生存者を諦めてなかったし、もし最悪でも、生存者を無事救出してここを脱出しなければならない。
「さて回るぞ」
再び俺は元来た道を戻りだした。

◇◇◇

「……隊長…」
永谷が悲しげな声で呼びとめる。半周した辺りだ。入念に、死体も見て回ったが、どれも息をしていなかった。
「……」
自責の念が身を駆け巡る、目蓋が熱くなった。

――俺は何をしとんのや

――敵を制圧するんやろ

――なのになんやこのザマは

――途中から俺は何をしてた

――怒りに身を任せて何をしてた

――ただ、ただ怒りに任せて何を

――石田の仇を隠れ蓑にして、殺しとっただけやないか

――何が自衛官やねん、笑えるやないか、泣けるやないか

――何も護られへんかった、何の助けられんかった、何やこれ

「ちくしょうがぁ！！」

視界が揺らぐ、そのまま思いのままに壁を殴りつけた。

ばき

「「？」」

明らかに何かが割れる音。しかもコンクリのような物ではない、もっとずっと脆いものだ。

その壁を凝視して、振り返る。

「今ここ割れへんかった？」

「はい…、そうですね？」

永谷も目を丸くしている。

試しに壁を小突いてみた。

するとどうだろう、わずかだが反響してくるじゃないか。

「今聞いたよな」

「はい聞こえました」

「結構でかいよな」

「はい大きそうですね」

希望が灯った気がした。
「ほな行くぞ」
俺は消火ボンベを主切り振り上げ、叩きつけた。
壁は簡単にへこんだ、永谷の方を見て頷くと、俺はその中に飛び込んだ。

◇◇◇

「非常階段か？」
使われてなかったらしく、うっすら埃が積もっている。
先の希望もたたれ、がっくりを肩を落とした。また悲しみが襲ってくる。が、
「ん？」
地べたに落とした視線が、奇妙なものを捉える。
足跡があった。しかもまだ新しい。
その先には窓無き扉があった。
「おい、ここ閉まっとるぞ」
駆け寄る。
「ほんまや隊長」
「いくぞ」
「はい！」
半ば殴る様に叩き開ける。
「「！」」
鼻が曲がる異臭がまず突く。

部屋はさらに1メートル程で曲がっていた。
永谷は顔をしかめる。人間じゃないでしょこれは、と呟く。しかし、構わず俺は角をまがった。

「「！！！」」

女だ。先見た様に酷い目に遭っていたが、瞳はこちらを見た。

「おいあんちゃん大丈夫か！？」
「うわぁ…なんだここ」
永谷はさらに濃くなった異臭に愚痴るが、俺はそれよりも先に刀で彼女を縛る紐を切り落とした。
あわてて抱きかかえてみると彼女は瞳を閉じていた。一瞬否な予感がよぎるが、脈があることで安心する。それよか、
「おい、なんか着るもん持って来い、上の奴にも伝えろ！」

◇◇◇

しばらくして永谷が2人を連れて戻ってきた。
「やりました隊長！我々の勝ちです！！」
「ほんまか！？ようやった！！」
2人は開口一番にそう報告した。自分でも顔が綻ぶのが分った。しかしこうもしていられない。俺を胴上げせんとする勢いで誉めまくる3人へ、
「さあ、喜ぶのは後回しや、外出よう、この方を病院へ」
上にあがって更に朗報がやってきた。
『隊長たいちょう！！キッドが、キッドが味方すると連絡がきました！！』
つんざくオペレータの声が受話器から流れる。

痺れる耳を押さえながら、しかし内心ではオペレータ以上に絶叫したかった。
「やったな、村ちゃんよ」
「ええ、吉岡さん」
「おかげさんでこっちも死人(負け)無しや、そっちの生き残りはんは？」
「はい、衰弱し切っていますけど、大丈夫だそうです」
「そうか、よかった」
缶コーヒーを渡してくれる。
ぐびりと飲んで、ひと息。
「いよいよやな」
「はい、まずは初戦突破です」
ぐ、と父の刀を握り締めた。後戻りはできない。在るのは己が信じる道のみ。

絶対に、守る。必ず、護りぬく。この身潰えようとも。

陽光が進む道を照らすように輝いている。

2．それぞれの闘志　―　B　航空自衛官・村田大輔の場合　（下）（後書き）

徹夜してえらい目に遭いました。次回もよろしくお願いします。
今回もまた遅れてすんませんでした。８月にもう入りますし、可能な限り話進めていこうと思います！

ご一読有難うございました！感想・指摘などもよろしくです！

2．それぞれの闘志　ー　C　犯罪者・中村成の場合（前書き）

友「あれ、Cは？」
俺「……今考えてます↑11／8／13時間軸がおかしくなるので変更しました」

※すいません、圧倒的資料不足で、すさまじい構造無視が発生しております。あくまで娯楽空想小説として、お楽しみください。

2．それぞれの闘志　―　C　犯罪者・中村成の場合

八月二九日、某病院

「うぅ……、ぐぁぁ…、……」

広げられた新聞にシミが出来る。目の前の記事には、ついこの前まで親友“だった”学友のインタビューが載っている。

そのあまりにも非情な裏切りに、ただただ涙溢れるばかりだ。

◇◇◇

八月六日、広島。原爆記念碑前。

黙祷が終わる。

「続きまして、菅直人首相より、お言葉を頂戴します」

「まず最初に、この悲惨な戦争に巻き込まれた全ての皆さん。特に、強制移住を強いられた、中国、韓国の皆様に、深く深く、お詫びと、追悼を――」

日本国首相、菅直人のスピーチはこう言って始まった。

「もう二度と、この過ちを繰り返さないよう、また、今我が国を取り巻く全ての困難に打ち克つ事を、誓います。また、この戦争を引き起こした罪は、今も私たちの中に、自制と自責の年として深く刻まれており、加えて未来永劫、あの戦争の被害国へ、無限の援助をすることを誓います。これで、私の追悼の言葉と、させていただきます」

◇◇◇

ぐ、と包帯の巻かれた拳に力が入る。何が、『無限の援助』だ。ふざけるな。

進み続ける円高に、株価暴落。予算の逼迫と大幅な増税。苛烈な所得制限。

中村成（しげる）、彼の家の工場もその波に苦しみ喘ぐ一つだ。

彼の家はそれなりに需要のある精密機器の製造を営むが、相次ぐ災害と不況には勝てず、“週休四日制”と言う異常勤務体制が続いている。彼はそれを知って自ら部活を辞め、高校を休んで父とともに発注元を広げようと駆け回った。

しかし帰ってくるのは素気無い返事ばかり。品質と生産の早さに定評とプライドがあるだけに、納得がいかなかった。ある時、溜まりかねて、断った企業へ聞くと、

「中国や韓国で作った方が安いし、正味、品質とかも特段拘らなきゃ、売り物にはなるしね」

看過しがたい暴言に頭に血が上り、剣道部で培われた彼の腕力を以てした拳が相手の顔に炸裂した。

危うく傷害罪で訴えられるとこだった。

父に散々絞られたその次の日、まだ怒り冷めやらぬ時、あの演説を聞いた。

気付けば、曽祖父の軍刀片手に全力で市役所内を、『奴』を探して駆けていた。

◇◇◇

八月六日、広島市役所待合室

「菅！！覚悟しやがれ！！！」
仙石副官房、樽床元衆院議員と談笑していた首相に、飛掛かった。

◇◇◇

八月一〇日付、朝刊

彼の行動はまさに瞬敏であった。
マスメディアの取材班らでごった返す市役所内を、その人ごみを利用して駆け回り、最初は通り過ぎた、僅か警官二人が警備する待合室へとたどり着いた。

そこから彼の行動は凄かった。そうとしか言いようがなかった。
その警官二人を打倒し、ドアを蹴破ってすぐにいた二人を斬り倒すと、そのまま菅を殺すのではなく、人質にしたのだ。

彼はまだ一七歳、現役高校生だ。

そして、“あの”演説が始まる――

◇◇◇

再び、八月六日、広島市役所

「…、……」
まさか本当に出来るとは思わなかった。あの演説を看過出来なくて、抗議しようと役所へ向かった。しかし役所の方は人でごった返している。周囲の話を聞いていると、どうやら首相一味がいるらしかった。

いつの間にか演説への抗議が、首相本人への怒りへとなった。

――あんな馬鹿な事を言った奴が、

――散々俺等の期待を裏切ってきた奴が、

――甘い汁吸って踏ん反り返っている奴が、

――――今、ここにいる！！

柱の陰から、まず警備員を打倒した。警官だから相当なものだと覚悟して飛びかかったが、予想以上に打たれ弱かった。脳天に一撃、腹に一撃を加えて黙らせ、部屋へ入った。

まず目に入ったのは手前にいた二人だった。仙石と樽床。ともに国を売り、私腹を肥やし、俺達を虐げた一員。躊躇は一切なかった。

無言のまま切倒せば、その向こうで腰を抜かし、悲鳴を上げることもなく、ただ震え固まる“御目当”がいた。

斬り殺さんと、刀を振りかざし、

「やめた」

鞘へ納める。

「ちょっとこいや」

ずいと、寄せて、

ゴスッ

眠らせる。

◇◇◇

八月一〇日付、朝刊

わずか一七歳の彼のどこに、あれほどの事をさせる力があったのか。周辺住民にインタビューすると、

「昔っから、強情って言うのか…、決めたら最後やり通すまで周りの言うことは一切聞きませんでしたねぇ…」（隣家に住む主婦談）

「堅いなって思うこともあるんですけど、結構みんなの指示あったし、進んで委員長とか引き受けてましたよ」（小学生時代の同級生談）

中から聞こえてきたのは差し詰め、少年らしい青臭い正義を持つ頑固な性格、と言ったところか。それが、こんな犯罪を引き起こすとは、誰も思わなかっただろう。

◇◇◇

八月六日、広島市役所三階、第三待合室

鍵を閉め、ソファを動かして入り口を封鎖する。すぐに破られるだろうが、時間稼ぎにはこれぐらいでいい。

程無くして、ドンドンドンと乱暴な音が響いてきた。

「潮時か」

未だ延びたままの首相、否、もうすぐ“故”首相なのか。
窓を開ける。目下、さっき見たものとは比べ物にならない、人、人、人。辺りが埋め尽くされていた。
俺は息を吸い込んで、その群集一帯に聞こえる声量で。

◇◇◇

八月六日、広島市役所外。ＴＶ中継。
「既に要請を受けた陸上自衛隊特殊班が待機しており、加えて犯人の武装対策、周辺の治安維持のために戦車の導入が決定され、今、配置に着いた模様です――」
「あそこです、見えますでしょうか、広島市役所三階に、犯人と、人質の菅総理が立て籠もっている模様です。あっ、今、窓が…、犯人です、犯人が――」
「聞こえるか！！全国の日本国民諸氏よ！！」
びりびりと、大気を揺らす怒声。

◇◇◇

（演説全文）
「今貴君らは！！
少なくとも自分を取り巻き、売国奴の開放を訴える者たちよ！
果たしてそれが得策か！？

問おう、自衛隊員らよ、
これが今まで諸君らに何をしてきたかァ！振り返っても見よ！！
一度でも諸君らの功績を讃えた事があったか！？その努力を労い、それに見合う称賛を贈ったことがあったか！？
否、そんなことは一度もなかった。
それどころか、防衛の要である諸君を暴力装置よわばりし、予算を減らし、しかし有事の際には酷使し、その上で自衛隊員は人に非ずという政策を行ってきたこれを、今更、守って何になるという！？

そればかりではない。

政権樹立当初から憲法遵守の名のもとに、諸君らの全てを否定する、行動・声明・約束をしてきた彼らのどこに、守る価値があろうか！　否、有るわけがない！！在る筈がない！！！

加えて問おう、諸君は日本男児だろう！　誉れ高き武士だろう！！
ならばなぜ、自らを否定する憲法を守るのだ！！
それとも諸君は、命有る国民よりも、この憲法が大事と言うのか！！！

もう一度問うぞ！　諸君が守るのはあの薄っぺらな文か、国民の命か、どちらだ！！
諸君の中に、一人でも国を憂い、誇りと正義を貫かんとする者は、この俺と共に闘おうと言う者はいないのか！！

そしてこれは傍観する国民よ！　目を覚ませェ！！
売国奴の言葉を鵜呑みにするなァ！！
我々が謝罪し、援助する必要などどこにもない！！むしろそれを隠れ蓑に、非道な仕打ちをしてきた各国に賠償を求める権利を、が、有る！！

それともなんだ、その身に宿る慈愛によって培われた全てを、それを悪用しようとする者に手渡そうと言うのか！？
日本人の誇りは、正義をも守れぬ脆いものなのか！？　否、そんな筈がない！！
我々は日々、溝に捨て、政治家の私腹と怠慢を肥やすために日々汗を流し、税を納めているわけではないだろう！！
そして我々には、その税の使い道を決める権利がある！！政府ではない、国民すべてに与えられるべき権利だ。
ならばこれを行使しよう！！
今本当に護るべきものは、残すものは何か、よく考えてほしい！

大和民族よ！　目を覚ませ！！
我々は此れしきの困難で負けるほど弱くはない！！

アイヌ民族よ！　その腐った被害妄想を捨てよ！！
そんな妄想に囚われていては、いつまでも文化再興が出来るものか！　立ち上がれ！！

琉球民族よ！　思い起こせ！！
かつて東洋一の文化と、最も厳しい戒律で繁栄した栄光を！！
それを再興することは今尚可能だ！！

そして、

大阪経団連よ！！　政府に踊らされて何が楽しい？　かつて『天下の台所』といまわしめた大阪商人が、どうしたというのかァ！
何のための造幣局だ！！
貴君らには円の価値を安定させる義務があってしかるべきだ。ならそれを実行してはどうか！！

福井県民よ。何故、そこまで潔癖になるかァ！
全ての行いには必ずリスクが付きまとう！！　それなくして前進も、再興もない！！
それを恐れて、原爆で亡くなった九十万人に、今尚死と戦いながら作業する福島第一原発の作業員らに、恥を感――」

◇◇◇

八月一〇日付、朝日新聞朝刊

かくて、許可が下りた陸上自衛隊によって催涙ガスと、麻酔弾が容疑者に撃ち込み、首相の安全が確認されて、終焉を迎えた。この事件は、気の触れた少年の無謀極まりない事件として記されるだろう。

以下、財界人や政治家による不毛な批判

インタビューを受けた高校同級生による、非難

◇◇◇

八月二九日、某病院

「…ぁぁ、……ぅっ…、……ぁ？」
泣きながらその新聞も捨てると、下に

『通告状』

白く折りたたまれたのがあった。
「？」

何の事かもわからず、開けてみる。

言葉を失う。そこには、

「　　」

『中村成(しげる)。以上の者は国家転覆煽動罪・思想扇動罪・殺人未遂罪・公務執行妨害・名誉棄損罪・恫喝罪…計一〇の罪状が状況証拠より確定しているため、即時死刑とする。抗告、提訴・再審議申し立ては無効である。　以上』

思考が停止する。

「はは…、なんだよ…、何なんだよこれぇぇぇ！！！」

絶叫。すぐに医者が飛んで来て、いくつもの薬品を注射され、意識が飛んだ。

次に目を覚ました時。

「シゲルくん、我々と共に闘わないか？」

思いもよらぬ声がかかった。

2．それぞれの闘志　―　C　犯罪者・中村成の場合（後書き）

謹んで、広島原爆で亡くなられた皆様の御冥福をお祈ります。

2．それぞれの闘志　―　D　技師・河内澄美の場合（前書き）

本来８月９日長崎原爆投下日に投稿する予定だった話。遅れてすいません。

友「ほんと、約束守らへんよな」
俺「仕方ない野郎が！　こっちはお前と違って頭悪いんやから課題終わらへんのや」
友「入学した時は同じ成績だったのにねぇ」
俺「喧しいわ！！」

それでは第７話、お楽しみください。

2．それぞれの闘志　―　D　技師・河内澄美の場合

昭和二〇年八月九日、長崎。渡井靖吉博士宅

「博士、おはようございます」
「やぁ、河内君。今日もよろしく」
早朝、博士と呼ばれた男は声の方向を見やり、挨拶するとすぐさま視線を戻す。
彼の宅は小高い丘の上で、ちょうど長崎港を含む下町を見渡せる。
止むことなく金属音を放つ海軍工廠、鉄血勤皇隊の朝練マラソン。
徐々に上がり始まる各々の家庭の火。それらは朝日と共に。

「綺麗ですねぇ」
「あぁ。人が、生きている。それを素で感じられる」
ヒョロリと痩せて白衣を着た男とがっしりとした体つきの少年の二人並んで、その光景をしばし見渡す。

しばらく後、白衣の博士の方が、
「さあ、今日も一日、頑張ろうか」
「はいっ！」
威勢の良い返事にほほ笑んで、
「さあ、今日は資料の整理だ。久しぶりだからね、長丁場になるよ」
「了解であります！」
少年は最敬礼する。

◇◇◇

２０１１年４月、東京大学。

「さあ、出てった出てった」
「言われなくても出ていきます！！」
女は怒りのまま吐き捨てると門を飛び出した。
そのまま早歩きをしながら、
「あーあ、東京なんて来るんじゃなかったわ。６年も居て大損。もーサイテー」
彼女はそのまま研究室を振り返ることもなく、寮へ戻って行った。
故郷へ帰るために。

◇◇◇

昭和二〇年八月九日、長崎。渡井靖吉博士宅

「さあ、こんなものかな？」
渡井はそう言ってぐ~っと背伸びをした。
「お、俺、お茶入れてきますっ」
待ちかねたように駆けていく。
「ああ、冷えたのを頼むよ~」
その背に頼む。

「っぁ~~、うまい！」
「こらこら河内君、僕のセリフだそれは」
冷えた麦茶とともにどこから仕入れたのか分からない西瓜をかじる二人。
太陽はとうに昇りきっている。みればもう十一時前だった。
一服して、河内と呼ばれた少年からすっくと立ち上がれば、
「さあ博士、研究を再開しましょっ！」
ニコニコとして博士を呼ぶ。が、

「…、ああ、それはもうやらない」
「??」
少年は目を白黒とさせている。しかしそれには構わず、まるで独り言のように博士は言った。
「もう…、駄目なんだ」

◇◇◇

２０１１年５月、兵庫県

「姉さん」
「…」
姉は黙々と、一心不乱にソレに向かっている。
「ねーさーん」
「……」
「もうっ、姉さんってばぁ！」
「うるさい！！」
怒声が部屋だけでなく工場をも震わせる。
「朝から盛んやなぁ…。まるで発情中の雌犬や」
角からヤンキー風の男が現れる。双子の弟だ。
「なぁに勝哉、喧嘩ならいつでも買うわよ」
「んなもんええわ。それよかお前の声どないかならんのか？　工場中に響くし、ほら見てみいよ、瑠伊（ルイ）なんか体縮めとるやないか」
そばで頭抱えて体縮めている妹を指す。
「…これは地声よ。それよりあたしに用？　無いなら出てって頂戴な」
「…、。親父が呼んどる。ソレについてやってさ」
くいと顎をしゃくって指す。

「分かったわ。すぐ行く。――、それと、ここは禁煙！」
頬を張って咥えていた煙草を叩き落とすと、さっさと行ってしまう。

それを見送ると、残された弟妹は、
「姉さん、何があったんだろう、あんなにイライラして、」
「だから、発情中なんやって」
「勝哉兄さん！」
「冗句や、ジョーク」
そう言って再び煙草に火を点ける。そして二人はそれを見下ろす。
「ほんまにこんなん出来んのか？」

◇◇◇

昭和二〇年八月九日、長崎。渡井靖吉博士宅

「な、何を…、」
「だから、もう、ダメなんだ」
突然の言葉に、わなわなと手が震える。しかしそこには怒り、よりも動揺があった。
そして博士は、
「もう、何をしても…。この国は…、この国は……」
「何を仰いますか！　僕たちにはいつだって陛下がいます！！」

沈黙

博士は何も言わない。太陽がジリジリと肌を焼き、熊蝉の鳴き声が大きく響いて脳裏を掻き交ぜる。
この瞬間が永遠のようだ。

「そんなものは――」
ユラリ、と博士が立ち上がる。
「そんなもの――、フッ、君は若いな。幾つだっけ？」
「１４ですが…、博士もまだ２８でしょうが」
「君の２倍だ」
「話を逸らさんといてください。何が言いたいんですか！？」
「…」

再び沈黙

しかしそれを破ったのは二人の声ではなかった。

轟音

「Ｂ－２９やないか…、なんで警報が鳴らへん！？　博士っ」
「……」
「博士！！？」
博士はぼうっ、と空を見上げたまま、動かない。

「見給え、河内少年」
僕に向かうのでもなく。惨状を前に、何もかもに絶望したような声で、言走る。
否、もしかしたら既にもう、先生にはあの光景が見えていたのかもしれない。
「なにを…、です？」
「…、敵が悠々と領空を舞うことを許している軍を、」
「　」
「それを既に当り前にしている町の連中を、」
「　」

「愛国とは名ばかりに、なけなしの爆弾を抱えて死んでいく学徒らを、」
「博士！　それ以上は！」
いくら国お抱えの博士でも、それ以上言えば、危険思想として捕えられてしまう。

「考えてもみたまえ、」
「博士！」
「いつ、陛下が、私達を守ってくれた？」
「　、それは、」
「軍部はいつも戦勝を発表しているが、ならどうして生活が良くならない？」
「…っ、それは、。」
「答えられるかね？」
一拍、
「全てはハッタリだ」
最低な、真実。
「もうこの国に、新たに兵器を作ることも、戦線を打開することもできない」
しかし、先生は――、そう僕が言うより先に、
「鉄が足りない。油が足りない。飯が足りない。日用品が足りない」
「――っ、」
「人がない。技術がない。――そして何より、時間がない」
「、――」
反論しようとして、
「本当に…、本当に、ないんだ…。何もできないんだ…」
「はか、せ……、。」
ぽつぽつと零れる雫が乾いた地を穿つ。決して雨ではない。
涙だ。

博士が泣いている。

父に白血病と診断されたあの日でさえ、不治の病と宣告されたあの日でさえ泣かなかった博士が。

ヨコチン（横浜鎮守府のこと）に研究を否定されたときでさえ、涙を見せなかった博士が。

博士の親兄弟が戦死した時、葬式にも出ずに研究に没頭していた博士が。

「泣いて、泣いておられるのですか…、博士、」

この時、なぜか僕まで、涙が、目から汗が、零れていた。

「ああ、そうだ、泣いているんだ…。この私が、」

沈黙

「そうだ…、父の死にでさえ、悲しめなかったこの私が…」

サイレン

◇◇◇

２０１１年５月、兵庫県。河内精密。

コンコン。

社長室の扉が叩かれる。茶を啜るのをやめ、入室を許可する。

「うい、どーぞ」

「失礼します」
入ってきたのは、さっき呼んだ長女。
「何か用？　父…、社長？」
「まぁ座れや。そう焦んな。ほら、お前の好きなカルメ焼きあるから」
「レンチで頭砕かれたい？」
「…、遠慮しとくわ」
家内に似て冗談とユーモアが通じひん奴や。
そんなもの構わずどかりとソファに座られる。遠慮も何もあったものじゃない。
「で、何の用、ってもちろん――」
「せや。アレのことやけど…」
娘の眼光が一層細く鋭くなる。
「開発を止めるつもりはないわ」
…、やれやれ。頑固なところは俺に似たか。どうしようもないカタい性格に溜息をつく。こういう時、煙草が吸いたいが、娘は煙草が大嫌いだった。
「言うとおもたわ。けどな、――」
そう、残念ながら。
「―けど、もうそんなこと言ってられんようになって来たんや。この調子で景気が悪なっていけば、赤字とか、そんな話では済まへんようになってきた。せやから――」
「でもまだ、現状ではそうはなってない」
断ち切って、そう言われる。
「しかしや。これから悪くなっていくのは目に見えとる。お前の知ってるやろが、東北の親戚のとこの立て直しもある」
「なら私の貯金でやる。それならいいでしょう？」
矢継ぎ早に反論される。
「ちょうど、景気が悪なってくるなら人手も少なくなるし、増設しない分、場所もいくらか空くでしょう？」

どういうことやろうか。凍結された分、確かに土地は空いてしまった。製品の試験室を増設・強化しようとしたもので、面積はそんなに大きくない。ちなみに今こいつが作ってる場所はそこの隣、増築のために設備を避けた場所だ。いや、まさか、

「空き地に実験場作るつもりかお前！？」

「ええ、何か問題が？」

アカン、大学はやっぱり４年にしとくべきたった。６年も東京にやってたせいで常識が欠落してしまっとる。

言葉に出来ないもどかしさと言うか、話にならない苛立ちに頭を抱えて、

「アホか。んなもんお前の懐で建てれるもんやあらへんやろが」

すると向こうは

「はァ？　そんなの当たり前じゃない。だから、懐にあったものを作るのよ」

「どういうこっちゃ？」

「ちょうど真ん中を走る、水路の覆いを開けて、その上に空き地丸々仮設小屋で覆う」

「そんなんで試験できんのかいな」

すると、娘は蔑む様に

「…、あのね父さん。私達ガソリンの取り扱い許可でさえ取ってないのよ？　どうやって旅客機用航空燃料（JetB）とか戦闘機用航空燃料（JP8）を持ってくるのよ。そんなことしたら豚小屋行きだわ。私だってまだ娑婆とはお別れしたくないわよ」

年頃の娘が豚子屋とか娑婆とか言うのは、なぁ。おれも昔はよう暴れとったからなぁ…。

それはそれとして、娘の言うことは正論だ。うちはそんなものを扱うような事業ではない。

「じゃあ何を試験するんや」

考え込むように腕を組んで、

「、そうね。精々ファンの全力運転ぐらいじゃないかしら。それも

外部起動の…。あの設計図には自力起動用の電気始動機(スターター)もあったけど…」
「ん？　なんや、モータのことか？　ならウチの十八番やないか。何で言わへんのや」
　するとかくんと首(こうべ)を垂れて黙ってしまった。
こうするときはいつも決まって同じである。
「なぁに、迷惑なんてかかれへんし、怒りもせぇへんがな。気にすんな」
　こういう所は昔から変わらない。かわいらしい所だ、娘唯一の。
どうでもいい事に、顔が綻ぶ。
「ほんと…？」
「ああほんまや。何たって俺が造るんやから」
「えっ！？」
　がばっと、顔を上げると、目を白黒させている。
「何を驚いとんのや」
「いやだって、父さん。あれに反対なんじゃ…、」
「ああ、一経営者としてはな。せやけど、お前と同じで、俺ももう一回夢を追いかけて観たくなったんや。曾祖父(ひいじい)さんからの夢をな」
「父さん…！」
　それに、
「それにな、折角、お前がやりたいもんを、夢を見つけたんやないか。やっとさ。それを応援すんのが、せめてもの詫びや。」
　声が小さくなり、震えてるのを自覚する。それを振り払うように声を大きくして、
「さ、さあ、説教は終わりや。この事は、ドンとこの親父に任せとけや！！」
　そして、半ば追い出すように、
「さ、アレがお前をまっとるぞ」
「え、あ、ちょっと、」

扉が閉められ、足音が小さくなると一人、ため息が出た。
家内と長男が逝って、もう１０年にもなるんか。

社長机に、涙が毀れる。

◇◇◇

昭和二〇年八月九日、長崎。渡井靖吉博士宅

サイレン

それは空襲を告げる。

家から人が出てくる。
工場の煙が途絶える。
教会の鐘がやむ。

「ああ…、涙なんて枯れていたと思ってたのに…、」
まるで毒づく様に呟く博士。
直後、

どさり

「博士ッ！？」
突然崩れ落ちる博士。地に横たわる体を抱き起こす。
「ッ、熱っ」
熱射病だ。
「博士、早く木陰に、冷えた水持ってきます！」

木陰に運んで、水を持ってこようとする僕を、博士は呼び止めた。
「そんな、ものは…、いい。それより、私に隣に居てくれないか…」
「何を言ってるんですか！！　博士、このままじゃ脱水症ですよ！？」
「ああ…、わかってる。だがもとより私の命はもう僅かだ。無駄だ」
「しかし…ッ！」
さらに反論しようとして、やめた。
「少し、言い訳させては、くれ、ないか」
「……、わかりました」
それは博士を助けられない。しかし、そうしなければいけないと、今は聞くべきだと思った。
「私は、
わたし、は、……、
悔、しいのだ…。くやし、いんだ…。
いつも研究所で、引き籠ってるだけなのに…、国を助けるとか、命預かるとか、実感が湧かなかった…。

なんて情けないんだ。

満州で、
餓島で、
太平洋で、
命を掛けて皆が戦っているときに、

私は、

私はただ、

興味だけで、

発動機を研究し、創っていたんだ。
目的を持たず、我が身赴くままに、しまいには研究が認められずに、癇癪を起して逃げ出してきた。
嗚呼おろかな、ああ、愚かな…。
父が、兄が死んだあの日、も、そうだった。
死をも、私は軽んじたのだ…。
二人に、軟弱者と言われて、頭にきていたかもしれない。
これでも改心しようとしたんだ…。母に、君の父に、どれほど彼らが私に期待していたのか聞いて…。
だからこそ、私は一層研究に打ち込んだ。
来る日も、くる日も、
設計、設計、再設計――。
モックを作っては壊す日々。
三日三晩夜を徹して、設計した時もあった。
そして――、
そしてすべてを投げ出した。
連中は、私の研究を無駄だと言い腐った。
『戦局は決している。特攻機を設計しろ。』

奴らは私の持ってきた設計図を放り捨てるとそう言った。

あの時ほど、怒りに駆られた時はない。
あの時ほど、虚しさに駆られた事はない。
あの時ほど、、……、あの時ほど…、

そして、私が携わった特攻機で、友が…、ろくに戦果も挙げられずに撃墜されて、無碍に命を落としたと聞いたとき。
心に刻んだんだ…。“本当の、『決戦機』を作ってやる。誰も死なない。無敵の発動機を”とな。

だがその時、白血病を患っていると言われた。そして、しめたとばかりにこの地へ、故郷へ戻った。

その日から、知っているだろう、私は、我武者羅に、飯も、睡眠も惜しんで、ソレの、設計に取り掛かった。死に絶望する時間が、今までよりも時間が惜しいと思えた。ほんと、今思えば狂人の所作でしかなかったんだか。

もう誰の泣っ面も、作らせん。見たくない。

そしてできたのが、アレだ」
そうやって、血の気の失せた指で、軒下の、真黒な皮鞄を差した。

言われるままにそれを取ってくる。
「それを、君に託す」
「!?　何を仰いますか博士!?　自分は――」
「き、君には…、色んな可能性がある。私以上の可能性が、。」
それを僕は首を振って否定する。
「自分は、学校成績など全丙の阿呆者です。腕っ節にしか能があり

ません。なので、、博士の仰る様なものなどは…、ありません。ですから―」
「馬鹿者！！」
博士の眼光が再び鋭く輝いた。
「過小評価するほど愚かなものはない！！　それに何も、今から研究者を目指せと言ってるわけではないのだ」
「？」
「私の命はもうあとわずかだ。そして、日本の命も。君がどう足掻こうとも、もう手遅れなんだ」
「では僕は…、僕はどうすれば…ッ！」
「まぁ、そう慌てるな。たとえこの戦争が終わろうと、この国は再び戦禍に呑まれる、必ずだ」
息を呑む。この悲しみが、再び襲い来る。博士はそう言い切ったんだから。
「だがしかし、」
博士は語気を強めると、
「誰が、次の戦争まで負けると言った？」
「…、！？！」
「喩えこの戦争で、負けたとしても、命があればいくらでも反撃できる」
「それは…、そうかもしれませんが――」
しかし、たとえ命が在っても、
「兵器が…、技術がないと――」
「私がそんな柔なものは設計するとでも？」
「…」
鋭い口調で言われる、それは刃のように。
「しかし、僕は――」
なおも反論しようとした時、

閃光

遅れて、轟音

◇◇◇

２０１１年８月、兵庫県。河内精密。

「おおっ、大分形になってきたやないか」
「あ、父さん。…と経理部長さん？」
コレの腹の下から出てきて見れば、二人の姿があった。
「どしたん？　二人して」
するとなぜか経理部長は弱り切ったような顔をした。
「どうだい糠倉君。これでも――」
「わ、分かりましたよ、社長…、はぁぁ…」
肩をばんばんと父に叩かれる経理部長は、何かブツブツ言ってさっさと行ってしまった。
「…な、何だったの？」
状況についていけず聞いてみる。
「はっはっは、何もあらへんあらへん」
大口開けて笑っているのだから、大方大丈夫なんだろう。
少しばかりの不安に囚われてると、状況を聞いてきた。
「ん…、そうね。父さんの言うように、粗方できたわ。外に発注した部品も届くころだから、もう完成すると思う」
「しかし早いなぁ…、」
「東京にいたときに私名義で発注したものもあるからね。製造する側じゃ、普通の早さよ」
「そういうもんか…、ほぉ―」

まるで少年のような好奇心いっぱいの眼で見る父。
そんな父に壊さないで、と言ってから、私は再びボロボロの設計図を見直し始めた。その制作年月日は、『昭和二〇年七月』。

しばらくして、父が再び私を呼んだ。
「んー。なにー？」
振り向かずに聞き返す。
「これって、どのくらいのパワーなんや？」
「ええと、設計上は、…んと、……」
改めて、『目標・計画値』欄を見て、私は目をこらす。ごしごしと目を凝らす。
「どうした？」
堪え切れなくなったのか、横に立つ父。
「なんや、書いてあるやんか」
「いや…でもこれは…、ありえないわ…、」
そこに書かれた数値は。

◇◇◇

昭和二〇年八月九日、長崎。
「イテテ…、どうなったんだ、。」
瓦礫に埋もれた体を起こす。
博士と話してて。それから。それから、急に光が、飛んで、来て…、。
「そうだ！　博士は！！？」
猛烈な気力で体を立ち上がらせる。
「！」

そして彼が見たのは、
空は暗く、雲に覆われ、
目下、焔は嵐がごとく、
地を埋めるは、数多の、
人、ヒト、ひと――――
否、
そうであったモノ。
町は尽く薙ぎ倒され、
川は赤黒い何かに覆われ、
自らの足元からは、
無数の眼。
呻き声。
それらは、残酷にも、総て、均しく、彼の脳裏に映し出される。
少年はふと、突然に、喉の渇きに襲われた。
駆け出そうとして、右手がすさまじく重いことに気付いた。
「??」

一刻も早く川に行きたい彼はその右手を見やることもなく、ぶんぶんと振り、落そうとする。

肉親より、博士より、自身の安全より、本能は優先された。

「ハァ、ハァッ…、…」

浦上川につき、水をすくい上げようとして、右手にまだ重みがあることを悟って、見る。

「――ッ?!!ッッ!!?!ッ!」

そこには、

硬く、

固く、

堅く、

鞄を握り締める自分の右手があった。

力を入れた覚えも、入ってる感覚もなかった。

かと言って焼き付いてるわけではなかった。

「――、――ッ」

無理やりに左手でそれを引っぺがすと、もう手を使うこともなく、犬のように水面に顔をつけてがぶがぶと呑んだ。

それに満足すると、横たわる骸を押しのけて土手にもたれる。

既に気力は失せて、呆然としていた。

◇◇◇

昭和四〇年、兵庫県。

当時は朝鮮特需、東京オリンピックと終わり、日本はさらなる高みへ向かっていた。

「もう、二〇年になるんか…、」

夕暮れ、出来たばかりで鞄以外まだ何もない社長室で、一人つぶやく。

あの後すぐ親戚に助けられた僕はそのまま親戚の所で高校、大学に行かせてもらった。当時は感謝してばかりだったが、今からすれば、父の遺産があったんだから当然だったと言えよう。
大学で工学部を専攻して。それを卒業した時、親戚の婆さんが、あの鞄を渡してきた。
最初は、当時の記憶が甦ってきて、後悔と恐怖から開けるどころか、見ることも躊躇っていたが、ある時、博士の口癖を思い出した。
それ即ち、

「あと一歩、前に進もう。一歩だけでいい。進めることが大切なんや」

その意味をもう一度噛み締めた時は涙があふれた。
「…、さあて、久しぶりやな、博士」
僕は凹んだ金具を開けた――。

◇◇◇

２０１１年９月、兵庫県。河内精密。

「「…」」

父娘二人揃って、まじまじとそれを見つめる。

それ即ち、

『ネー６００設計図大綱・資料』

ではなく、

……

その実機。河内精密試製ネ６００ジェットエンジン。

そう、今日はその試験日。

ファンの全力運転も終わって今、アフターバーナー込みの全力運転中である。

小屋いっぱいの爆音が心地いい。

水路にひびが入り、留め具が悲鳴を上げる中の。

やがて、既定の試験時間が終わる。

まだ埃舞い散り熱気の凄い小屋の中、二人は頷く。

「〜〜〜ッ、やったぁぁぁ

2．それぞれの闘志　―　D　技師・河内澄美の場合（後書き）

友「ほんと、約束守れないよね」
俺「うるさいなぁ…、メカの話はなんとか出したやろう」
友「まぁ…、これでメカと言えるか怪しいけど。違う。それじゃない」
俺「？」
友「『776航空隊』は？」
俺「あ…！」
――――――――――
友「ついでに言えば、作中油の事、矛盾してるよな」
俺「ああ、これ。つぎメカの話になった時に分かるわ」
友「それはいつ？」
俺「……」

2．5．それでも僕は（私は）歩くんだ（前書き）

今回は短いです…すいません。

2．5．それでも僕は（私は）歩くんだ

「連絡は来ているよ。村田」
『おおそうか、よかった。なら――』
受話器の向こうから安堵の声。
「ああ、皆まで言わなくてもわかってるさ」
やや驚く相手。
「ああ、ああうん。そう。井戸知事にも連絡してある」
『返事は――？』
「あ～、ちょっとなぁ。ああそう。やっぱり慎重なんだよなぁ…奴（やっこ）さん。ああいや、ちゃんと説得してるぜ。――、そりゃそうだよ――」
５５階、誰もいないこの階に。
「ああ、ちゃんと商工にも話はしているよ。――あ、うん。――まあまだ返事はないけど…」
ただ一人、夕日へ向かう。
「けどな…村田」
携帯電話へ向かうのは、かつて「Ｍｒ．コバンザメ」と呼ばれた、まだ少年の風貌が残る、
「僕だって、護りたいものと、許せないものはあるんだ。譲るつもりはないよ」
――大阪府知事代理。
『しかしお前の方も大丈夫なんかい。既成政党の奴らも五月蠅いやろう――』
旧友のいらぬ心配を笑うと、
「ははは。相手だって今の状況を弁えているさ。先生がなくなってまだ一月も経ってないのに、しかも遺言を聞いておきながら、それに刃むかおうとする奴はいないよ」

まだ心配をしてくる相手に、自分の心配をしろと皮肉って、
「防衛はお前に任せる。だから政治はこの僕に任せろ。な、この茨木しょういち大阪府知事代理にどんと任せとけよ。ああ、絶対に――」
その声が重なる。

「『日本から独立する。皆を守ってやる』」

◇◇◇

２０１１年８月３１日。京都、某所。

軽トラの中。
「ほんとすいません、おばさん」
深々と礼をする。
「いいんだよぉ、そんなにせんでも。」
おばさんはにこにこと笑って顔を上げるように言う。
「タカちゃんも大変だったねぇ…、まあ、ここにいれば安心やで。しっかしよう判らんことになったなぁ…、」
おじさんは手拭いで顔を拭いながらそう言葉を掛ける。
「そうですよね…、いったいどうして…、」
「ただえさえ大変なこの時期に、自衛隊を解散するなんて―。それこそ今一番必要な人たちなのに――」
「自衛隊は出ていけ――ッ！！」「どうしてまだ解散してないんだ――！」「税金泥棒は今すぐ京都から出ていけ――！！」「憲法を

順守した民主党を支持しよう――！」

「「「…！」」」

言葉を失ってしまった。

「今のは…、」

「見ての通りよ。京都の大学連合の生徒らだよ…、」

「ったく、あんなことするのやったら、田を耕して働きやがれ」

おじさんは吐き捨てた。

「……ん？」

「「どうしたの…？」」

前を見れば、

「検問…！？」

「あれ…、やっぱり！」

一瞬、見覚えある服装に、素早く検索を掛ける。

「「どうしたの？」」

「あいつら…警察じゃない…っ！」

そこには、ネットに上がった写真と同じ“ニセ警官”が、いた。

「ほんまや…！！　よし、裏道行くぞッ」

軽トラの速度が上がる。

2．5．それでも僕は（私は）歩くんだ（後書き）

友「とうとう、感想どころか評価もなくなったね…、」
俺「うん…、せやなぁ…、そろそろ不安になってきた」
友「けどここで『感想ください』って頼んでも来ないと思うよ」
俺「なんで？　そんな暇ないとか、評価する価値もないってか？」
友「ちがうよ。面倒なんだよ。この専用のところで感想を書くのが」
俺「？？」
友「だから、もっと手軽な…。そう、ツイッターみたいなやつ」
俺「ほう…。考えてみるか…。」

――今アカウント名考えてます。…てか本当にそうなんだろうか…？

3．蠢くそれは　―　E　自衛隊　（上）（前書き）

資料不足と情報不足と時間不足と、そしてなにより自分の執筆力のなさに苦悩する今日この頃。

3．蠢くそれは　ー　E　自衛隊　（上）

２０１１年９月１６日、京都府・陸上自衛隊桂駐屯地

平日の朝だというのに、その門には数千人にも及ぶ群集が詰めかけていた。

彼らは皆一様に白地に赤丸二つ、民主党のシャツを着ている。中には原爆ドームを模したものや、ゾンビの格好をした者もいる。

民主党・共産党の支持者なんだろう。だがその雰囲気はカルト集団のような、異様で歪。それらが喚くのでもなく、ただ何かを待つように沈黙している。

「司令…、正面入り口も後門も、周囲をぐるっと民衆が包囲しております…」

隊員が怯えた口調で報告してくる。

「うろたえるな。好きにさせておくんだ。…我々には反論する権利が、ない、。」

そのまま窓際、“真っ赤な集団”に向かって大森中部方面後方支援隊長は毒づく。

「ふん、対応の遅さは変わらないってか」

結局、あの発表の後、通達のＦＡＸが来ただけで、逮捕しにくる気配は一切ない。それは自衛官を安心させると同時に、左翼社会の京都ではその感情を逆なでするのだ。

力を有しながら、理不尽な糾弾を受け、それに反論できない悔しさと苛立ちに、無性に煙草をくわえたくなる。

（那覇の奴らは大変だろうな……）

防大同期の飛行隊長を案じながら、椅子に座る。

同時に、机の電話が鳴った。

「？」

防衛省の輩や中部方面隊長ぐらいしか知らぬ番号だ。だがディスプレイに映る番号はそのどれでもなかった。

一瞬、あの“黒警”の脅し電話がまた来たのか、という思いが過ぎる。

「はい、もしもし」

汗かいた手で受話器を取る。

『――ああ、漸く繋がったよ。陸自支援の大森さんだよね？』

「！！？　…、そうですが」

殺意の籠らない、やけに軽いような口調だった。思わず肯定してしまった。

『そうかそうか…、ああよかったよ。周囲に人はいないかい？　君一人かい？　そうじゃないと話ができないんだけど…』

ちょうどこの部屋には誰もいない。それより、

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。あなたはいったい誰ですか？　どうしてこの番号を―」

『ん？　あ、しまった、。そうさね、周囲に居ないようだし、いいか。僕はね、茨木。茨木しょういち大阪府知事代理さ』

「！？」

『まあそう驚かないで聞いてくれないかな。実は――』

◇◇◇

２０１１年９月２１日　沖縄県・航空自衛隊那覇基地

「自衛隊は出ていけ――ッ！！」「憲法九条を守れ――！」「無駄な抵抗はやめろ――ッ！！」「犯罪者を追い出せ――！」「暴力装置は排除しよう――！！」「自衛隊と右翼は日本の恥だ――ッ！！」

ぐるりと周囲と囲む、赤い旗と凄まじい罵声。
そんな罵声如きでは崩れない司令室。
「…」
目下の状況に御年４８の司令は迷い苦しんでいた。
およそ一ヶ月前に突然下された命令。突然渡された逮捕状。
その日から訓練どころか人気も失せた米軍基地。
そして、４日前に掛ってきた、一本の電話。
「私は…、どうすれば、いい――？」
――『君が護るのは、何だい？』
最後に掛けられた、言葉。

『司令！大変です！！』
飛び込んできた無線は、飛行場勤務隊の自衛官から。
「どうした？」
全く見当もつかない。
「周囲の柵を破って、デモ隊が侵入してきました！！」
「！」
「―デモ隊は朝報告された規模の数倍になって、飛行場を占拠しつつあります。このままでは――」
サイレン
「「！！」」

スクランブル。
邦外戦闘機―おそらく中国の戦闘機だろう―が、近づいている。
そして、
『司令、司令！　デモ隊がアラートハンガー前も占拠していて、発進できません！！』
『空警隊から連絡！！　侵入機数は現在１２機…、さらに増えています！』
「侵入機とは…、防空識別圏内ということか！？　どういうことだ！！？」
戦慄が走る。
「おそらく、レーダー圏外の超低空からの侵入だと思われます！」
オペレータが叫ぶ。その横で、
「三…、五、……、さらに増えています…！　識別圏外も合わせて―…、３０機です！」
「「何！！」」
続いて、
「報告を受けた第６高射群から司令へ！」
「？」
そのまま受話器を受け取る。
『大臣命令はどうすればいい！？』
「　」
こっちが返事するより先に投げかけられる。
『迎撃態勢に入ったのはいいが、解散命令が出ているせいで、判断を迷っている。指示を仰ぎたい！』
「　」
体が強張った。一瞬で冷や汗が体を冷やす。
「後発１８機が防空識別圏内に侵入！」
「県教委がサイレン停止を求めています！」

――どうする

「先発後発が合流、編隊を組んでいます！」
「旅客管制塔がスクランブル発進はまだかと！」

――いや、あの命令は、全ての事象に優先されるものだ
――このままデモ隊に投降すべき

「不明集団、与那国島上空へ到達！」
「県警が介入しました！！」

――そう、我々はどうせ法律がなければただのテロ集団

「、不明集団、速度落とします！」
「海上自衛隊の、…、全艦船が出港しました！」

――『君が護るのは、何だい？』

「「「「司令！」」」」

――俺は、。

タコツボの前で泣いていた祖母の姿が、米軍基地反対デモにいた小学校の先生の姿が、拘置所の中で悔し涙を見せた親父の姿が、父をムショ送りにした県教委の姿が、俺を犯罪者として取材に来た沖縄タイムズの記者の姿が、

「スクランブル、スクランブル！　築城と新田原からイーグル／ファントム上がりました！」

「南日本防衛連絡会から通告！　『応戦せよ！　命令は守るな、応戦せよ！』」

――『君が護るのは、何だい？』

「！！？　米軍が撤退して行きます！　応戦できるのは」
「不明集団、応答！　中国空軍です！…『　　』」
「中国軍、宮古島を通過…、。、石垣島から通報！　奴ら落下傘部隊です！！」

――どうした、どうしてこうなった？

棒立ちになる。

領空に侵入されて、３０分が経つ。

◇◇◇

同時刻、八重瀬分屯地・第６高射特科群本部

「返答は？」
「ありません！」
（やっぱり、あそこの爺にはそんな能無いか）
そう呆れながら、深く息を吸ったのは、今年４月に赴任したばかりの仲村一等陸佐／第６高射特科群長・八重瀬分屯地司令。

彼の双肩には、六つの部隊が圧し掛かっている。彼の処にも、同じように解散命令が出され、不服として異議申し立てをしているう

ちに、また電話が来た。
そして沖縄県で唯一その話に乗り、即時応戦を可能にした。
腕時計を見る。聞いてからもう15分も経とうとしている。
「時効だ」
再び深呼吸息をしなおすと、マイクを取る。
「聞こえるか？　いいか、よく聞け。我々は、国民の生命と財産を守るために組織された。そして何時だってそのために働いてきた。よって、それを否定した政府の命令を、私は聞けない。君たちも、同じだから、今ここに居るんだろう？　今、未曾有の規模の中国戦闘機がこちらに向かってきている。那覇基地はすでに警察と県民に占拠され、応戦できるのは我々しかいない。総員、今一度戦闘態勢へ。私達は国民を守るために、戦う！　武器を使うのを怯えるな、躊躇うな！！」
◇◇◇
「中国空軍、目視圏内に入りました。現在解析中」
「海上自衛隊、掃海艇あおしまより入電。命令受諾に伴う全艦船の自沈処理が終了したとのことです。」
「解析終了。Ｙ－９輸送機３機・Ｊ－８戦闘機２１機武装確認できず。なお、残り６機は宮古島上空に滞空しています」
「司令、今すぐスクランブル発進を、こうなればデモ隊の強制退去もやむをえません！」
「滅多なことを言うな！　司令、今すぐ避難命令を、我々も命令を受諾し、戦う意思がないと伝えましょう」

「司令、早くスクランブルを！」
「さあ早く、ご決断を！！」
「「司令！！」」

―

――

ヤメロ、ダマレ――

「…、だ」
「「　」」
「は！？　何でございますか？」
言い合っていたオペレータと飛行隊長が向きなおる。
そして向けられたのは、。

「うあぁぁッ。、ぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！！」

数瞬としないうちに、管制室の窓は澱み息をする者はいなくなった。

◇◇◇

２０１１年９月２３日

『目標に到達。記録を開始します。簡易報告開始』
『了解。』
『徳之島、無事を確認』
『与論島、まだ火が燻っています。』
『本島は？』
『えー…、南側、基地あたりはほぼ壊滅しています。跡形も残っていません』

『北側…、これは…、人…か？　あ…、金武湾・中城湾に無数の――』

警告

『警告、０時方向、正面、高速熱源、退避、退避！』

3．蠢くそれは　―　E　自衛隊　（上）（後書き）

御一読有難うございます。ほんと、この駄文を呼んでいただいて有難うございます。

前回言っていたツイッターの件について、たくさんの人からご意見を頂き、『話を進めろ』『調子に乗るな』『時期尚早』などと言う意見を頂きましたので、第1部が終わるまで、控えようと思います。

引き続き、よろしくお願いします。また、感想・疑問・質問・抗議・指摘など、御座いましたら感想欄の方へ、お願いします。

ではでは、また次回。

3．蠢くそれは　―　F　UNION　of　KANSAI　Governm

予定（内容）を急遽変更して投稿しております。

3．蠢くそれは　―　F　UNION　of　KANSAI　Governm

「――よって――は、承認・可決されました――」
卓上が、溢れんばかりの拍手で覆われる。
「それではみなさん―」

◇◇◇

２０１１年９月１０日、某所

「御集りの皆さん、急な召集にもかかわらず、御足労、有難う御座います。それでは、関西広域連合緊急会議を、始めます」

パラパラと拍手。

「続きまして、議論開始の前に、先日９月６日に、お亡くなりになりました、橋下徹知事と、平松邦夫市長に、心からの冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げたく存じます。皆様、御起立下さい。」

委員の顔が翳る。

「黙祷！」

「――有難う御座います。御着席ください」

◇◇◇

「おい君、何故その席に座っている」
議会が始まって、最初に発言したのは、飯泉徳島県知事／医療担当委員。その声には疑問ではなく、明らかな怒りと嘲笑があった。
「―、何故って、僕は橋下知事の代理ですから」
それは当然、というのは茨木大阪府知事代理。
「はぁぁ、大阪人ってのは、隣人の死に喪に服すことなく利益を追求するのか？　さっすが、大阪の商人は違うなぁ…」
「何を言ってるんですか、飯泉委員――」
それを遮るようにして、
「それに、後ろのお前！」
躊躇いもなく指される指の向こうに居る一人も、飯泉委員を不快にさせていた。

「…」

しかしその男は一言も発さない。それは堅牢な銃のように。
「どういうことだ！　どうしてこの場に犯罪者がいる！！」
すると、少なからず、それに賛同する者がいた。
「そうです委員長。茨木委員はいいとしてどうして入室させたんです！？」
「即刻退室、警察へ連絡を！」
山田京都府知事／観光・文化振興担当委員と、平井鳥取県知事／委員だ。
にわかに卓上が騒がしくなる。
「静粛に」
井戸兵庫県知事／広域連合委員会委員長は、だた一言、つぶやい

た。

「彼は、――」

一瞬の静寂を、茨木委員が破った。直後、彼へ視線が、侮蔑に満ちた視線が、集まった。

しかしその表情に臆したところはなく。

「彼は、現段階で、唯一防衛能力を持ち、状況を把握する自衛隊代表の、村田大輔航空二尉です。」

「お前ふざけてるのかぁッ！！」

顔を真っ赤にして怒る飯泉委員は、椅子を倒して立ち上がる。ドカドカと靴音高く茨木委員の方へ向かいながら、

「それを犯罪者というんだ！　それも憲法に反する、重罪人だぞ！！？　それを判って言ってるのか！」

「彼らのどこが犯罪者ですか！　いつ彼らが法を犯したと言うのですか？」

茨木委員も立ち上がってそれを迎える。

「今正にそうだ！　こいつらは、存在するだけで罪なんだ！！　おまえみたいな暇な若造ならあの中継を見ていただろうが！！」

「あっ、申し訳ありません。自分、公務で忙しいので、そんな暇はありませんでした」

剣幕にビビることもなく、しゃあしゃあと返答する。

「なら教えてやる、自衛隊は、菅総理の御英断によって解散になったのだ！　庇ったお前も捕まるぞ！！」

そしてそのまま向き直れば、

「お前も何か言え！　この犯罪者が！！」

茨木委員の背後でずっと黙って佇む村田二尉の胸倉を掴んで叫ぶ。

「……」

「口も聞けないのか、この野郎！！」

彼はそのまま顔面を吹き飛ばした。まだ傷の残る鼻面から派手に血が飛び散る。
「！！　何をするんです！！」
茨木委員が近寄る。
「ふん、どうだ犯罪者、悔しいか？　そのまま殴り返して構わんのだぞ？　ま、そうすれば傷害罪で即豚箱行きだがな！」
そのままゲラゲラと笑う。

「大丈夫か村田…」
「――、ッ」
顔が上がる。

「　、な、なんだその目は…？　何だ、儂を殺そうというのか？」
誰もそれを止めようとしない、誰もこれを哀れみの眼差しではなく、好奇の対象として。

「静粛に。会議は中止します。茨木君、次回は彼を連れてこないように。そうでなければ君の案件を議論することも出来ない」
その一言で、会議は終了され、物々しい雰囲気は解けた。

◇◇◇

この翌日、韓国と北朝鮮は、竹島を埋め立て拡張し、ミサイル基地を建設中だと正式に発表した。

◇◇◇

２０１１年９月１２日、奈良県庁

『知事、外線三番にお電話です』
「誰からだ？」
『いつもの――』
「居ないと言え。」
『は…、はい――えっ、あっ知事、お客様です』
「だ――」
そう聞き返す前に、
「こんにちわ～荒居知事、今日こそ関広連に入ってもらいますよ～」
扉を開けて入ってきたのはニカニカと童顔を笑わせる大阪府知事のイヌ。うっとおしい。
「私は公務中だ。ガキは出ていけ！！」
しかし怒声に臆することもなく、
「もうその手には乗りません。そうやって追い出すの、これで８回目ですよ」
「しつこいお前が悪い！　とっとと出て行け！！次は不法侵入で引き渡すぞ！」
足蹴にしてやりたい気持ちを抑えて追い出す。

奈良県は、関西広域連合が設立されてから、ずっと加盟を拒んできた。

ひとえに自分の地位を守りたいがために。
あたり前だ。やっと掴んだ安住の地だ。自ら捨てるワケなんてない。どうせ議会は南部の能無し共しかいないんだから、ちょっと言いくるめておけばいい。
県民の奴らも政治に興味のない、木偶の坊ばかりだったから自由にできる。

――まずは中国人の政治・生活面での優遇だ

お得意様も機嫌を損ねて献金額が減らされたたまるか。議員は大抵共犯にして黙らせた。

――ついでに政府批判もしよう

金の価値もわからない馬鹿どもを洗脳するのは簡単だ。県教委や選管は手の内。文句は言わせない。

――ようやく政府が自分に近づいたと思えば、西の馬鹿商人どもが騒ぐ

前らに盗られてたまるか。これは私のだ。

――そしてその五月蠅いのがいなくなったと思えばそのイヌが出しゃばる

どんなことされても、金が出て行くのなら参加しない。

「ふぅぅ…」

大きく息を吐くと、そのまま内線に繋ぐ。

「…、ああ私だ。記者会見の準備をしろ。―そう、そうだ。余計な口を聞くな！　クビにされたいか！　――いや、今すぐだ！」

◇◇◇

２０１１年９月１３日、某所

「それでは、関西広域連合緊急会議を始めます」

黙祷もなく、すぐさま論議が始まる。今回は揉めた前回と違っている処が二つあった。

まず一点目は、

「皆さんもご存じでしょうが、一応、簡単の紹介をしときましょう」

そう言って議長は右側の長机を見やる。
「まず手前から、今回正式に加盟した三重県鈴木知事、島根県溝口知事、長崎県中村知事、福井県西川知事、そしてオブザーバとして鹿児島県伊藤知事、加えて中京都・新潟州構想で以前から関っている名古屋市長の河村さん、新潟県知事の泉田さん」
一通り紹介の後、次回からさらに広島県と山口県、福岡県と宮崎県、沖縄県がオブザーバとして参加する旨が言われる。

これで加盟・参加自治体は２０近くとなった。

昨日の韓国・北朝鮮の発表があって急遽参加を決めた所も多い。そうなるとやはり自衛隊基地のある都市や領土問題の当事者である県に参加が偏ってしまうのも仕方ないのかもしれない。

参加自治体の増加もそうだが、それ以上に異常克つ重要な点、

「まず昨日の奈良県知事の会見ですが…、」
「どうしたものかな……」
昨日、奈良県は議会を通して、今後一切、関西広域連合に関する条例や要請は断ることを決定し、条例を可決した。主張は従来と変わらず、それにとうとう強制力を持たせてしまった形である。

「ひとえに責任は？」

徳島県知事が前回と変わらず噛みつく。
睨む視線の先には、『大阪府知事代理』のプレートが。

「今すぐ辞任すべきではないかね、茨木委員」
返事はなし。
「関西にとって戦略的に最も重要な手札をふいにしたのだ。その責

任、判っているだろうな？」
　またしても沈黙。
「聞いているのか！」
　しかしその視線は下を向いたまま動かない。
「皆さんも賛同いただけますね！？　彼の行動は、目に余るものがある！　いくら橋下知事の指名であっても、政治的手腕・交渉力において多いに劣っている！　これによって損なわれる利益は計り知れないものですぞ！！」
　拳を叩きつけて、
「それにこれ　は自衛隊とも結びついているというではないか！　菅総理大臣閣下の御意志に背く、もはやこれは政府への、国民への反逆行為ではないのか！」
　空気が固まる。
「議長、今すぐそいつの強制排除を！　警察へ引き渡しましょう！！」
　そう怒鳴るも、賛同も反対もする者もおらず、皆が視線を宙に浮かせる。それがさらに彼の怒りを増長させた。
「それから島根ェッ！　お前、竹島が盗られたからこの連合に加盟したそうだな！」
　反射で肯く（うなず）島根県知事。
「この大馬鹿者！！　何が“盗られた”だ。独島は大韓民国の領土だろうが！　歴史を知らんのか貴様！　今すぐ撤回し、謝罪するんだ！」
　あまりの剣幕に押されながらもそれは違うと島根県知事。
「黙れ！！　我々が大韓民国にしてきたことを忘れたのか！？　それを、恐れ多くも独島を譲ることで妥協してやる、と仰っているのに、そんな彼らの慈悲をも無下にするのか！！？　今私達がこうして生きていられるのも、皆朝鮮民族様のお陰というのが分からんのか！！」

「それは違いますよ」

そう呟いたのは、

「「「議長…！？」」」

「議長――！」

新たな怒声が上がるその前に、

「よし、やった！！」

「「「「？」」」」

視線が一気に集中する。

「どうしたんですか、茨木委員」

井戸議長が問いかける。

「あっ、はい。皆さん朗報ですよ！」

その声に空気が緩む。

「岡山県、四国3県、九州残りが加盟検討へ、次回オブ参加予定の広島県などからも正式加盟への検討を取り付けました！　これで西日本が加盟する可能性が出てきました、それも高い確率で！！」

それを聞いた途端、周囲の議員から歓声が上がる。それに気力を削がれた飯泉知事はすとん、と席に着いた。

一通り歓声が収まったのを見計らって、井戸議長は、

「それでは、今回の緊急議題『連合域内の国民の安全保障と治安維持の今後』について、茨木委員、それに河村市長と中村知事、よろしくお願いします」

「それでは、――」

三人が席を立ち、モニタが点る。

「まず最初に、私達は、日本政府から独立し、新たに関西広域連邦の設立およびその独立憲章草案について、ご説明いたします」

◇◇◇

「――です。既に自衛隊内での意思統合は一部を除いてほぼ完了。大阪経団連も賛成しました。そして――」

「自衛隊、経団連ともに即時戦闘態勢／無制限増産体制に入っております。しかし、自衛隊では主要装備、特に戦闘機・戦車の経年劣化およびその物量不足は著しく――」

「また一方で燃料その他日用品原料に緊急輸入を検討して――。あの発表以降、徐々に円安が加速し始めており――」

◇◇◇

「――、以上をもちまして、設立理由及び今後の計画と経済試算について、説明させていただきました。御静聴ありがとうございます」

モニタが消え、三人が席に着く。

「「「……。」」」

そして議席はやはり沈黙に、重く、鉛のような沈黙に包まれていた。

「この議題は非常の重いです。ぜひ御検討いただきたい。しかし、自己の保身ではなく、国民の安全の元で」

その言葉がさらにその沈黙に圧し掛かる。

「……、以上をもちまして関西広域連合緊急会議を終了いたします。次回について、皆さんの予定が決まり次第決定します」

議長の発言で、その日はお開きとなった。皆一様に、これほど長

く感じた会議はないと思っただろう。

◇◇◇

２０１１年９月２１日、大阪府庁

『築城からイーグルが、新田原からファントムが上がりました！』
「状況は！？」
『侵入した中国空軍はそのまま進撃をしており…、沖縄本島へ真直ぐ進行しています！！』
「村田ァッ、そっちはどうなってるッ！？」
『今呼びかけてる！！　那覇航空基地応答せよ、スクランブル、スクランブル！！』
「―ッッ！　今度はどうした！？」
『第５３～５６警戒隊沈黙！！　奄美通信隊とも連絡が取れません――、』
『クソッ！　そいつはジャミングだ！　オープンで良い、確認しろッ！』

『――。通信隊基地の消滅を確認…。…、。沖縄本島以南…、全、滅――…模様……』
『ノイズ…、回復。――八重山分屯地から…、録、音…です。』
「ッ……。流してくれ」
『――こちら第６高射隊、　、デモ隊の侵入で那覇基地は動かない…、。――、現在総　――挙　、迎撃し　。、が…　。う゛、――ぁ　。…――繰り、――返　、』

◇◇◇

２０１１年９月２２日、第２回関西広域連合緊急会議

会議は終始ざわめきに包まれていた。

「沖縄が全滅しました。」

「承知しています」

「忌々しき事態…」

しかしそんな中、

「自衛隊がいないだけで…、こうなるのか…、」

「「「！」」」

発言が波紋を広げ、緊張が走る。

「議長、採決を。このまま無防備なままでは全滅させられるだけです」

茨木委員が申告する。

それを止める声はない。

「…では、採決をとります。」

――採決が始まる。

投票権があるのはこの日までに規約案を可決させた１３府県。

◇◇◇

「――採決の結果、賛成１３の全会一致で、『関西広域連邦独立設立案・一次憲章』は可決されました！」

拍手に包まれる卓上。
「続きまして、暫定政府における閣僚指名を行います―」

◇◇◇

「それでは皆さん！　１０．１で、会いましょう！！」

◇◇◇

『――、通信機の感度は良好』
『オッドアイの稼働率は目標値を維持。』
『リンク切断、秒読み開始。　３、２、１　』

『逆探知成功、クラッキングスタンバイ』
『マニュアル起動、――開始』

『データ取得、送信します』

3．蠢くそれは　―　F　UNION　of　KANSAI　Governm

後半の失速感がすげぇなこれ…。いつか書き直します。

ああ、戦闘機話書きたい…。そして眠い…。

調べてて気付いたけれど『中村』姓が多いなぁ…、なんでだろ？

3．蠢くそれは　―　G　ヒト（前書き）

ここでまさかの緩衝文。

3．蠢くそれは　―　G　ヒト

「クソッ！」
プー、プーと通信不可を伝える音を垂れ流す受話器を叩きつける。
「大統領閣下」
冷静になるよう、水をさし出したのは秘書。
「判っている」
奪うようにコップを奪い取って、一気に飲み干す。背もたれに凭れ、息を吸うが、それは不快を加速させただけだった。
起き上って、
「事態は予想以上に深刻だ。陸海空軍のスパイ局の非常招集を。勿論ＣＩＡも忘れるな」
「畏まりました」
真意を問い返すことも、制止させることもない自動人形は部屋を出て行った。

「世界を変える、いや変わろうとするのか…？」

まだハリケーンの名残残る大雨の中、アメリカ合衆国ホワイトハウスの中の出来事である。

◇◇◇

「――イィですか皆さん！！　このように、日本はとてもとても悪いことをして、結局罰が当って負けたのです！！　いーですかァ、これは当然のことなのです！そしてェ、この罪は非常にィ重くゥゥ、それはァ、おじいちゃんやおばあちゃんが謝るだけじゃ足りなくてェ、私達も罪を詫びないとォいけないのです」
とある小学校、夏休みが終わって最初の授業、社会。　今日の内

容は、『9月2日は世界に謝る日』。
眼鏡をかけた、いかにもって言う体の女性教師が、それはまるで嘆(わめ)く様に生徒に教えている。
「ソコォ！　何話してるのォ！？」
いつもにない先生の口調に皆怯え、とうとう泣きだす子も出始めた。しかしそれでも説法は終わらない。
「だからァ、皆さんはァ、これから中国や韓国や、北朝鮮、ロシアの人を見かけたらか・な・ら・ず！　謝るんですよォ、いいですねッ！！」
生徒はもうみんな泣きじゃくって怯えている。子供達はみんな訳も分からず、ただ『自分たちは悪いことをした』ということだけが頭に残されて、この一日を終えていった。

それは日本の、どこにでも見られる光景。
加速し続ける左翼教育を知る者も、嘆く者も、関心を寄せる者も、いない。それは止まることのない、崩壊の足音。

◇◇◇

朝6時、普段ならまだ静かなこの地帯が、俄かに騒がしくなった。それは朝陽が昇るにつれて大きくなってゆく。
「やった！　やったぞおお！！」
真っ黒な隈を着けたまま諸手を挙げて喜びの雄叫びを上げるのは経理部長。彼はそのまま周囲をうろついて叫んでいる。
何たって久々の大口受注なのだ。しかもひと月の収益を黒字にするぐらいの。その上さらに来月以降もこの規模で発注するかもしれないとのこと。
「しかし珍しいてか凄い企業やな。この円高の時期に態々うちの製

品を選んでくれはるとは」
社長室。報告に来た経理部長の吉報に喜びより先に疑問が飛び出した。しかしそれもそのはず。あの発表があってから円高は鈍ったが、それでもレート79円台で厳しい状況なのだ。
そして尚も向き直って、
「しかし――、聞いたことない企業だったなぁ…、ええと。何だ、け、K―」
「K・U・H・Iだそうです。新興の企業ですが、バックが大きいらしく、資本金も多額なものでした。この目で見てきましたから、間違いありません」
「そうか。君が言うなら確かなんだろう」
なぜ先方が知っていたか、わが社の製品が優秀なのかそうでないのか。どうして今そんな大企業が生まれたのか、いくつか疑問を胸中に残す社長だが、今はとりあえず大口受注を喜ぶことにした。

◇◇◇

「ちィッ、なんてことだ！！」
白内障でぼやけた目を凝らして読む新聞の記事に激高する。
そこに書かれていたのは、
『自衛隊、警察を治安維持妨害容疑で制圧』
九月一日付の新聞。事件発生日は八月三十日。二日遅れの『速報』。その報道の遅さも重なって、テーブルに拳を打ちつけた。そのまま電話台へ行き、ダイヤルを回す。
「もしもし、会長？　急いで集会を――、え、決まった？　わかりました。今すぐそちらへ参ります」
「あなた…どちらへ…？」
台所から割烹着姿のままの妻が出てくる。
「ちょっとな…急用だ。会長の所までだ。遅くなるかもしれん」
そのまま玄関に向かえば、帽子をかぶる、行き先を告げる。

「許さんぞ…自衛隊…！！」
被爆し、しかし今なお逞しい拳をさらに握りしめる。
そんな彼の職は――、漫画家。

◇◇◇

場所：■■■

「出来はどうだね」
「上々です」
「うまくやったか」
「はい、それどころか、お釣りまでついてきましたよ」
そうやって差し出された報告書には、大阪の政治を担っていた両人が。
「あの短期間でよくここまで出来たな。主席もお喜びになるだろう」
「は、有難うございます」
さらに続こうとする会話をノックがさえぎった。
「おや、えらく早いな」
「もしや彼か」
「はい、その通りでございます。並行して命令を達成してきたのでしょう」
「ほう、そうか、ぜひ会おうではないか。中に入れてやれ」
「はは、閣下。おい――っと、すまないな、間違えるところだ」
「？」
「いえ、何でもありません。紹介します。――王傑です」
虎は放たれた。それもとびきり貪欲で獰猛で、狂乱したものが。

◇◇◇

「どけ！　どけと言うのが分からんのか！！」
国会議事堂に響く怒声。
警備員に取り囲まれながらも、さらに拳を振り上げて圧し通ろうとする。
「お引き取り下さい、お引き取り下さい！」
警備員はそれを必死に止める。
「ぬかせ！！　もう我慢なるか、首相を出せ、首相を！！　今すぐだ、」
警備員の一人がレシーバーに向かって言い合っている。しかしそれはすぐに遮られる、影から人影が現れる。
「来たか、菅！！　私だ、石原だ、あれはどういう――」
そのしわがれた、しかし未だその衰えを感じさせない口調が、途切れる。
「ナンダァ？　こいつ、ほんとに79なの？　なぁ」
一方は鳩尾に入れた蹴りを戻しながら、
「ああ、そのようだ。無駄に体が頑丈のよう。――おっと、申し遅れました石原慎太郎・東京都知事」
もう一方はしかし撃鉄を再び起こしながら、
「「現在首相は会談中でございます。お引き取り下さい。」」
背を直角に曲げて深々とお辞儀する、型に嵌った、人形のお辞儀だった。黒尽くめの、政府機関のどれにも当てはまらない異彩を放つその衣装が、彼らの殺意と違和感を増長させる。
そのまま顔を上げれば、痛みで、痛みで、膝を突く都知事の額に銃口を向けると、
「ちなみに、あんたはもう来れないけどな」

◇◇◇

「あ〜あ、まぁた汚れちまった…面倒くせぇ」
「フン、もう少し撃方を練習しろ」
歩きながら血糊と脳髄の張りついた上着を払う同僚を窘める。
「うっせ、余計な御世話だ」
「そうやって人からの助言を無視するからこうなったのだろう」

誰もいない廊下。

しかしその彼らの歩みの痕には、無数の骸が横たわっているのを知る者は既にいない。

3．蠢くそれは　―　G　ヒト（後書き）

学祭なう。疲れは取れない。眠い。忙しい。――結論、学祭なんて……！

次回、3．蠢くそれは　―　F'

3．蠢くそれは　―　F'　Japan　Government（前書き）

今回も短いです。

3．蠢くそれは　―　F'　Japan　Government

「――谷垣君、１０７票。野田君、１１０票。よって本院は、野田佳彦君を第９５代内閣総理大臣に指名することに決しました」

それは、２０１１年８月３０日の出来事。何も変わらなかった、出来事。

◇◇◇

「よくいったぞ、一川防衛相」

認証式を終えて、記念撮影に向かう廊下で、その言葉は掛けられた。

「いえいえ、当然のことですよ」

それに帰ってくるのは照れの入った笑顔。

それにまた笑顔に応えながら、

「いやいや。国民を守ることは、外に頼めばいい」

首相はそう呟いた。

ちなみに自衛隊が“解散”した現在、『防衛相』という肩書の意味合いは大幅に変わっている。

◇◇◇

国会が開会した。所信方針演説はヤジが飛ぶことなく淡々粛々と進み、終わった。

そして迎えた、９月１４日。

始まった国会で、ヤジは飛ばなかった。まして賛同の拍手すらも

鳴らなかった。
代表質疑応答はなく、議論が白熱することもなく、提案と採決が進んで、６つの法律が可決された。

曰く、
『不正情報流布防止法』
『電子情報管理法』
『（上記２法に対する）改正警察強化法』
『武器製造・研究禁止法』
『経済統制化法』
『政府権限優先法』

しかしその趣旨が国民に対し説明される日はなかった。

◇◇◇

「総理、戒厳令の件について…、」
山岡国家公安委員長が問う。いつもの強気はどこへやら、すでにその顔面はいっぱいの冷や汗を浮かべており、その形相はもうこれ以上耐えられない、といった風を成していた。
それもそのはず、何せまともな法整備のないまま、自身にもほとんど聞かされぬまま継続させられている戒厳令である。下からの突き上げは途方もないものになっているはずだ。

「続行だ」

しかし返ってきたのはたった一言。総理は振り向きもせず立ち去って行く。
「え…、あ、ちょっと、お待ちください――」
むんずと肩を掴み、強引に説明を求める。

「せめて外国人の、特に中・韓国人の保護の優先命令を。それと、各大使への警官配置、朝鮮総連への情報開示を――」
「離し給え、公安長」
「だから聞けと――」
声を荒げるも、ついに護衛に張り倒され、声にはならなかった。
完全に姿が見えなくなって、へたり込んだ山岡は思う。
――この国ももう終わりだ。早く金を集めよう

「山岡賢次だな？」
「　」
そこには、
「倭省人民治安隊だ。山田賢治、貴様を収賄・不正政治介入で逮捕する」

粛清の軍靴は、内側から響きだす。

◇◇◇

「大哥、大哥」
総理官邸。この呼び名で呼ぶ者は一人しかいない。
「出て来い、王傑」
執務室、ゆらり、と彼は姿を見せる。毎度毎度、怖気がするくらい物音を出さず、それこそ幽霊のように目の前に現れる。
その体躯は自分より頑強なはずなのに、煙より軽く細く、虚しく哀しい気持ちがした。
「で、どうした？」
「西の動きが活発になっています」
盛大に舌打ちをする。やっとあの五月蠅いハシモトとヒラマツを殺ったのに、まだ懲りないのか。そしてその怒りの矛先は“煙のような”王に注がれる。もっと言えば、自衛隊に撃退を許した“御客

”には一発どころか二発も三発もお見舞いしたいところだ。
怒りと落胆、それに底知れぬ恐怖が肺腑を押し潰そうとする。
「その彼らの最新の機密情報を、入手いたしました。御覧になりますか？」
「そうこなくては」
差し出された資料を受け取った。

◇◇◇

「いやはや、凄いな君は…。さっきは怒って済まなかったね…」
レポートを読み終えて、一言。
「ではこれで」
それを聞くとさっさと出ていこうとする王。
「まあまあ、一服ぐらいして行ってはどうかね。いくらなんでも、そんなに根詰めしていれば疲れるだろう？」
それを呼び止めるが、
「いえ、何時如何なる時でも任務が最優先です。気遣いは無用です」
その堅い眼差しを見て、首相は説得を諦めるがしかし尚も呼びとめた。
「一つ質問してもいいかい？」
それは以前から、否、会った時から思い、そして至極当然の疑問。
「――、何でしょうか」
振り返らず立ち止まる“音だけ”がする。姿は見えない。
「君は本当に中国人なのか？」

――返事はなかった。

◇◇◇

「オレは…、日本、人、なんかじゃ…、ない……！」

3．蠢くそれは　―　F'　Japan　Government（後書き）

政治編はこの辺りで。次回からはどんどん自衛隊と、戦闘機と、戦闘機と、戦闘機を、書いていきたいと思います。

4．前夜、彼ら彼女らは、。（前書き）

遅れてすいません。短いですが、約一カ月ぶり、投稿と相成りました。どうかお楽しみいただけたら幸いです。

4．前夜、彼ら彼女らは、。

九月三〇日、長居第一競技場

日も暮れんというのに、周囲はまだ賑やかで。
集まっているのは、帰宅客でも、スポーツ選手でもない。彼らのそれには達成感等ではなく、緊張と、警戒とがあって。

そして周囲の眼には怒りと狂気があって、彼らを見つめている。

◇◇◇

同時刻、某所

「ほな、おやっさん、せんせ、行ってきます」
まだ新しい墓石の前で花も添えず、一人懺悔する、少年の姿があった。

その時の彼の胸中は、どうだったのか。
そんなもの、知る由も、まして知る必要もない。
それは他人の考える邪推でしかない。

それは、不安か？
それは、恐怖か、
それは、憎悪か？
それは、絶望か、
それは、哀愁か？
それは、興奮か。
それは、決意か？

それは、同情か、
それは、否――。

◇◇◇

ただでさえ騒がしい長居第一競技場、同刻、その一端に人だかりができた。
怒声が飛び交う。その部分だけ、極端に感情が険しくなるのが見て取れた。

「なんや、どないしたんや」
その背後、一人の自衛官が問いかける。
しかし応対する警官はおらず、関係ないと言って弾こうとする。
「喧しいわ、何かあったんやろが」
そのまま警官の輪に入っていく自衛官。
「なんやこれは…、」
先ほど届けられたと、警官の一人が呟く。
個人へ向けたものではなく、長居第一競技場に宛てられた、封筒。
中には律儀に三つ折りにされた、黄ばんだルーズリーフ。

グシャリ

紙を握りつぶす音が聞こえた。

◇◇◇

「本当に大丈夫なんですか…？　無理ならば――」
「いけます」
見舞いに来た女性自衛官と、担当医の制止を遮る女性。
まだ彼女の体には、あちこちに生傷が。

まして彼女はつい先日、中絶を経験したところなのだ。
再び担当医は止めるように説得に入るが結局彼女はその説得に首を縦に動かすことはなかった。
それどころかまだ説得しようとする医者を毅然と睨めば、
「私は記者です。真実を国民に伝えるためなら、どんなことでもしますし、どんなものだって捨てられます。」
奇跡的に正気を取り戻し、あらゆる苦痛に耐えてきた彼女は、そして同じく女性自衛官の方へ尚も向き直れば、
「それが、私、産経新聞社東京本社所属社員の、新聞記者の使命です！」
もはや彼女を止める理由はない。
◇◇◇
「ええ度胸やないか…！！」
そのまま潰した手紙を放れば、歩き出す。
少し離れて、無線機をとれば、
「――ああ、俺や。奴さんはゲームをお望みや。派手に歓迎するで」
彼は何を思い、そして誰にこう言ったのか。
◇◇◇
同刻、道頓堀川
「フゥ…」
任務はひどく簡単だった。後は“お上”がやってくれるのを待ち、

結果を確認するだけ。

けれど体は過剰に汗を発散させ、水を摂取したくなる。

そのとき、

「ぐぅゥ…ッッ……！！？！？？」

世界が、撓む。地面が波打つ。ビルが、溶解する。

人が白い角材になる。自分の足が砂になってゆく。

…やばい、薬…早く薬を……！

常軌を逸する光景が目に映る、“幻覚”。

ようやくポケットから取り出した、真っ赤な、毒々しい錠剤をまず一粒飲む。

「ハァ……」

幻覚が止まって視界が回復し、自分が今膝ついているという状況を目視する。

息が荒く、ぜぇぜぇと激しく呼吸する。

「――！？！？」

次の瞬間、襲ってきたのは。

“――ッてんだよ、親父――”

何だ。

“あの子また――。まあ、恐ろしや――”

なんだこの光景は。

“――よ！　立ち上がれ！！　我々は此れしきの――”

誰だこれは――！！

「――い、大丈夫か、君。――おい！」
強く肩を揺すられる感覚が映像をかき消す。
見上げれば会社員らしい男が心配そうに見ている。
それを無視して立ち上がり、踵を返す。
やや足を速めながら、さらに錠剤を、毒々しい錠剤をさらに二粒飲み込む。
薬の効き目が出て、ようやく動悸が収まったところで足を止める。
呼吸。
俺は王傑。中国軍の諜報工作員。
◇◇◇
手紙にはこう書かれた。
『サア、ゲームノ始マリデス。
愚劣ナ関西人ショクン、私ヲ止メテミテクレ給エ。
私ハ殺シガ愉快デ堪ラナイ。
私ハ君達ノ苦シム姿ヲモット見タイ。
沖縄、名古屋。次ハ君達ダ。
政府ニ刃向カウ者ニ新タナ死ヲ。
故ニ私ハ正当デ、正義ナノダ。
コレヲ書ク僕ハ彼ト同ジ年ダ。
オ前ラノ企ミハ全部バレテイル。
諸悪ノ根源ニハ死ノ制裁ヲ』
――それは、あの日あの時の再来を、誰もが震撼したあの事件の再来を、示唆して。

しかし明日は今日になった。独立宣言は午前十時。市民にも既に重大演説と広告され、全メディアを強制して、全国に放送される。

そして、二〇一一年十月一日午前十時、大阪　　。

――――――

4．前夜、彼ら彼女らは、。（後書き）

いろいろと迷走しておりましたが、文章力・描写力を上げるには、ひたすか書くことしかないと知り、大急ぎで投稿となりました。次号より、本格再開となります。よろしくです。

では今回はこの辺で。

休載中に感想・評価点を書いて下さったユーザーさん、アドバイスをくれた友人、そして休載中にもかかわらず来て下さった読者さんに最大の感謝を！

PS．予告しておりました、3．蠢くそれは　―　E'　自衛隊（下）は話の展開上投稿していません。ただ、半分ぐらい書き上げてしまったのでもしかしたら来週投稿するかもしれません。また、3．蠢くそれは　―　G　ヒトも2節ほど書き足していますので、よろしければそちらも。

5．01　Burnt　ground（前書き）

遅れました。そして短いです。やっぱり一月と言うブランクは大きかったようです。

5．01　Burnt　ground

あたりを焔が包む。
目下にはさっきまで気炎を上げていた人間が。
鉄筋は飴細工が如く。
あちこちに水の焦げる音。
熱い。
灰を吸って真っ黒になった雨が。
しかし炎は収まらない。
空、光るものが。

「『なん　で　こないなっ　てしもた　ん　や…』」

◇◇◇

ピ、ピ…

電子音だけが響く、部屋の、朝。
大阪から海を隔て、四国山地を越えた遙か二二〇キロの地、高知市。

「…、ぅ……っ。…ッ」
電子音、否、この部屋に響くのはそれだけじゃなかった。声無き声。嗚咽。

部屋の中央。

片目を除いて、全身に包帯に包まれ、幾本ものチューブと接続されて、彼は、いた。

右目を除いて、足も、手も、胸も背も、頭も頬も、鼻も口も、赤茶けた血雫とともに包帯に包まれて、彼はいた。
一つは呼吸、一つは点滴、一つは心拍補助、一つは人工透析、ひとつは。幾つものチューブを命綱としながら、彼はいた。

それでも、彼は生きていた。

名を大輔、姓は村田。奈良に生まれ航空自衛官の父に元で育ち、そして又父の死とともに父と同じ道へ進み、F―15（イーグルライダー）パイロットになる。当時、独立前の肩書は二等空尉。
現、日本国軍務省自衛隊代表。

◇◇◇

あの日のミサイルの数は、尋常なものではなかった。急遽警戒用として配備されたパトリオッド3に対し、
第一波、64発余。
第二波、143発余。
第三波、97発余。
総計300発以上。
それぞれ十分も置かない短時間。わずか三十分もしないうちに演説をしている長居競技場の大阪府大阪市東住吉区を発端に、平野、阿倍野、住吉、生野、松原から、大阪市は完全に灰燼に帰した。
死者、負傷者行方不明者は二百万人を数え、無傷なまま四国、広島へ逃れられたのはたった六十万人余りだった。

「でも、もし」
――先輩が駆け出していなかったらもっと生存者は少なかっただろう。
辰巳軍務省事務補佐官／自衛隊代表秘書は炊き出しをしながら考え

る。
今こうして炊き出しに並ぶ人たちがもっと少なければ、と考えると震えた。あの大火の中に真っ先に飛び込んでなければ、と考えると震えた。
「でも、そのせいで」
先輩は瀕死の大火傷を負った。耐火服も着こむことなく、下したての制服に水を被り、消火ホースを掴んで飛び込んで行った。

パニックに押し潰された子供。
溶けた鉄柱をかぶった老婆。
瓦礫と炎から我子を助けだそうとした父親。
子供を見失い狂乱する母親。
真っ先にそんな彼らを押し倒した朝鮮人。
死体から金目の物を必死に抜き取る中国人。
精神を犯され火に飛び込んだ宗教信者。
十字架を掲げるキリシタン。
産声さえ上げられず燃えた赤ん坊。
救命手術を受け生きた患者。
新体制に抗議する議員。
独立宣言に迎合する公務員。
職を探すのを止めた生活保護者。
増注に喜ぶ工場員。
金の高騰にあえぐ投資家。
急激な円安に驚いた会社員。
極左翼教育を受けたゆとり世代。
ニュースに触発された高校生。

その総てが、燃えた。
彼はその総てを助けようと飛び込んだ。
消火ホースを持ち、両肩に生存者を担ぎ、自転車で灰となってゆ

く大阪市を駆けた。
自らの仲間と同僚をも迫る炎から逃し、最後まで残った。
バスやトラック、ヘリから果ては戦車まで用いて生きる百万人を逃した彼は、倒れる直前まで瓦礫を裏返し、大声を張り上げていた。彼の足は燃えていた。

そう思い返せば、自分はどうだっただろう。

◇◇◇

「何、代表は生きてるの？　――はっきりして。生きてるの？　――そう、判ったわ」
受話器を下せば、再び同じ着信音が鳴る。
それを記者らしい慣れた手つきで受けながら、
「各省庁並びに首相へ連絡。代表は生存、峠を越えたそうよ。急いで！！」
そう怒鳴ればまた電話に戻る。引切り無しにかかってくる電話、入ってくるファックス、ツイッター、ネット掲示板。それらを収集し、真偽を確かめ、関係者に伝えてゆく。そう、彼女こそ、
「沼田情報庁長官――」
「沼田さんでいいって言ってるでしょう！　用件は！？」
部下を叱って、
「夕方の会見ですが――」
「時間は？」
「四時三〇分からです。」
現時刻、三時半。
「時間あるわね…よしじゃあ、これやっといて」
唐突な命令に職員は戸惑う。
「え、あ、ちょっと長官？　どちらへ！？」
「現地調査！　会見放送までは帰ってくるわ！」

◇◇◇

「勝哉！　そっちは！？」

屋根にいる双子の弟を呼ぶ。遅れて、

「わかんねぇ！！　畜生、五日たってもまだ煙が止んでへんぞ！全く見えへんわ！！」

五日前、１０月２日生放送の演説の途中、物凄い光とともに、大阪は消滅した。その余波は兵庫まで及び、流れ弾であろう数発が工場に直撃、あちこちで火災が発生した。幸い私達の向上に直撃した物は二発。ともに不発だった。しかし危険なので操業を停止した。

家の窓から見えた、無数の光の筋を私は忘れられない。

今私達は周辺の工場従業員達とともに近くの体育会館へ避難している。

ラジオでは新政府が四国へ避難し、その中で自衛隊代表の決死の救助が幾度となく称賛とともに報道されていた。

私達のいる体育会館の中に自衛官が入ってきた。私の名前を呼んでいる。

不発弾の処分が終わったのだと言う。

勝哉とともに自衛隊の車両に乗り組み、送られる。

着けば、人だかりができている。

――私の実験場の周りに。

覗きを受けたような恥ずかしさと怒りに駆られ、その中へ飛び込む。

「ちょっと！　何してんのよ――！！」

人だかりの中で現場指揮らしい自衛官たちが気難しい顔で何かを語り、数人がエンジンをばらして測定している。
まるで警察の捜査のようで、怒りは、勝手にあらされた怒りは、頂点に達した。

「人のもんを何勝手にしてんのよ！！　どきなさい！！」

しかし自衛官は、

「退くのは君だ、河内澄美」
殺気のこめられた眼差しを向けられる。そして、
「自衛隊治安権、技術情報保全活動に基づく、あなたへの事情聴取を行う。返答次第では射殺が許可されている。」
「え、なんで？　どういうことよ――」
しらばっくれるな！！という周囲から怒声が上がる。それを抑えると現場指揮の自衛官は、
「このエンジンは現在国内では生産されていない。現情報内にはない、未知のエンジンだ。エンジンの無断製造・輸出の可能性がある。よってあなたと、あなたの工場・従業員の身柄を拘束させてもらう」
私が文句を言い返す前に、
「連れていけ」

拘束された。

◇◇◇

「ちくしょう…腹減ったなあ…」

5．01　Burnt　ground（後書き）

まだまだリハビリ中です。忙しいのもありますが。気長に待っていただけると嬉しいです。まだまだ感想は受付中、よろしくです～。

5．02　Breath（前書き）

また短いです。ほんまにすいません。

5．02　Breath

「うわ、ひっでぇ…」
「ほんまや、なんもあらへんやんか」
徐々に見えてくる真っ黒な大地が語るその悲惨さに、慄く新米自衛官。
民間徴用された四トントラックの荷台から身を乗り出し、前方を見つめる。
その二人に続いてつられた全員も身を乗り出す。
俄かに荷台が騒がしくなり、トラックのエンジン音もかき消すようになり。

「こらァ、アブねぇっつってんやろうが！！」

助手席から怒声が上がる。
「「「ス、すいません、吉岡隊長！」」」
うろたえた謝罪の声が上がり、ざわめきが止む。

「ったく、いけるんかこれで…」
再び助手席に腰を据えるのは吉岡二等陸佐。
今回の任務は『名古屋被害調査・瓦礫撤去』。新米自衛官―もといボランティアまがいの奴らがいるのは単純な人手不足によるもの。それでも体育会系の奴らや警察官らが中心で、体力に問題はない。
総計六〇〇人。今回は主に調査が主だろう。まあ、その調査もこうして一目瞭然なのだが。

◇◇◇

「現在円相場は一ドル＝二八〇円前後で推移しており、今後さらな

る円安になる可能性があり、専門家によれば固定レート時代の一ドル＝三六〇円突破もありうるとのことで――」
ＮＨＫラジオから流れ出るニュースをＢＧＭとしながら、しかしそれは工作機械の轟音に呑まれていく。あちこちで作業員が駆け回り、汗を流して製造に当たっている。
円安など気にする風もなく、作業員の顔は希望と喜びに溢れている。
工作機械はますます高く音を上げ、怒声は工場いっぱいに響く。
「さあ、生き残るぞ！！」

◇◇◇

「目標発見、武装確認できず。構成は…軽装甲車四台ほか、トラック。荷台にて人員を輸送してきた模様」
『――リァチェイエ。シャース』
「了解」
「抗議します！　どうして同じ日本人同士――ぐ」
「黙れェッ！！」
「司令、それでは…、」
「第？，？，？班作戦開始、攻撃を許可する、行けぇ！！」

◇◇◇

「ほんまに…これか…？」
新聞写真に写されたのは、だだっ広い更地になった、大阪。
誰しも目を疑う、つい2週間前まで暮らしていたところとは到底信じられるものではなかった。
人々はようやく自分たちが生きていることを実感し、疑問する。
傍には再開できた家族がおり、温かいおにぎりが配られ、丈夫な

毛布とがあり、体育館の中に居る。
『――生き残りましょう皆さん！　この日本で、愛す人とともに！！』
ふと、茨木知事代理の、演説がよみがえった。
とたん、何だが溢れてきた。なぜか判らない、どこからくる涙か実感できない。しかし、泣きたくなった。
「なんで泣いてはるんですか？　何かありました？」
◇◇◇
「隊長、ちょっとええですか？」
焼け残った名古屋市役所を調査していた一人が俺を呼びに来た。
一瞬迷彩服のズボンと名札を見やって自分たちの者か確認する。
「なんや、何かあったんかいな」
「いえ…、役所内ではないんですが、ちょっと…」
見つけた本人もそれが何か言い表せんようだ。
登録有形文化財の跡かたもなく、中央にそびえた塔は既にない。
青天井となった四階にきて、北東の方角を指す。
「ありゃ…、戦車…？」
目を細めて外形を掴み、双眼鏡でその形を捉える。
砲塔をこちらに据え、じっと睨むようにして。ポツンと一台。
「見た感じ七四式ではないと思うんですが…九〇式でしょうか？」
「いや…でやろか、キュウマルか…あれちょっと赤ないか？」
即座に暗めの色彩をした９０式戦車を思い浮かべるが、今あるの

は砂漠のような、赤みがかった色彩に、コンクリート色の斑が入ったものだった。

「あ――」

突然体が光に包まれて。

5．02　Breath（後書き）

時間がなくて、全然書けてません。ほんま、いつもいつも楽しみしてくださっている読者さんには申し訳ない気持ちでいっぱいです。

しばらく短いですが、それでも良ければこれからもどうか御付き合い下さい。

5．02v2　Breathe（前書き）

先週は風邪でぶっ倒れていました。すいません。

5．02v2 Breathe

「名古屋派遣隊より入電！！　未確認勢力より攻撃、吉岡隊長は生死不明！！」
「ネット回線に異常、一方的に切断されていきます！！」
「警報を鳴らせ！！」
「京都防衛隊沈黙！！」
「奈良防衛隊も沈黙しました！！」
「むわぁッッ！！？　熱ぅ！？　システム、システムダウンです！！」
「政府より通達って……しもた、大臣おらんねやったんや！」
「政府より再通達、現時刻を以て臨時代表・現場指揮を務めます、辰巳愛火です！！」

◇◇◇

混乱する室内に冷静さが戻る。瞬間、沈黙と安心に包まれたその中で、
「現状況を他国からの侵略行為と断定。有事国民保護憲章に基づき、反撃を許可します。」
口調は有無を言わせぬ。
「明野の対戦車ヘリ隊に出撃命令、目達原にも出撃準備。航空自衛隊旧西部航空方面隊にも。」
それから、
「国民の避難は？」
「奈良・京都都市では河川部への誘導を開始しています」
「それだけじゃダメよ」
慌てて一人が訂正を入れる。
「いえ、滋賀、三重、福井県では既に避難を完了しつつあります」

「オーケー、三県の国境も引き続き警戒、駐屯自衛隊へは即応体勢へ。加えて」
自らもアナログメモを書き込みながら、
「この辺にも避難警報を、」

◇◇◇

飛び立つ前から、煙は見えていた。
不吉な予感はしていたが、まさかそれが現実のものとなるとは思わなかった。いや、九月二八日があったはずなのに。
発動機は快調。ローター音や計器には異常値は見られない。両翼にはＴＯＷ対戦車ミサイルを満載させ、ガトリング砲もＯＫ。
大丈夫、いつもの訓練通り、ロックしてやればいい。

◇◇◇

「第五対戦車ヘリコプター隊到着、反撃開始」

◇◇◇

『僕』は、息を吸う。
『僕』は、息を吐く。
「もう一度言う。我々の任務は敵勢力を撃滅することだ。」
『僕』は、手に力を入れる。
『僕』は、冷えた手に見る。
「請願ではない。撃退だ。」

『僕』は、スロットルを捻る。
『僕』は、照準を再チェックする。
「怯えるな。目を、背けるな。」
『僕』は、呼吸する。
『僕』は、見たんだ。
「思い出せ。何も守らせてくれなかった政府を。」
『僕』は、怒る。
『僕』は、憎む。
「目の前で名古屋が燃えた瞬間を。」
『僕』は、ミサイルの安全装置を外す。
『僕』は、速度を落として空中停止に入る。
「俺達は何のために居る？」
『それは、　』
「忘れるな、。」
『うるさい。』
『いつもみたいに状況説明だけにしろよ』
「忘れるな。」
『説教なんかいらん』
「――俺達は、自衛隊だ。」

「『「煩いっつってんだろうがぁッ！！』』」

そして、

『僕』は、

『俺（ボク）』になる。

「全機、戦闘開始！！」

◇◇◇

どうしてだろう。何でぼくはここに居るんだ？
なんだろう。昨日までこんな筈じゃなかったんだ。

――ああそうか。もう警察官じゃないんだ。町のお巡りさんじゃないんだ。

思考とは裏腹に、足は未だ止まろうとせず、
血糊のへばりついた迷彩服を着て、
硝煙絶えぬ剣銃を振り回し、
頭上では無数の砲弾が飛び交い、
それを上回る爆発音と墜落音が鼓膜の存在意味を消失させ、
歩兵を撃ち砕いてゆく。

頭は状況の残忍さに比例して冴えて。
野生の勘と警察官の頃の運動神経が体を弾道から逸らし続ける。
状況は意識から疲労の概念を忘れさせ、何時か頭に叩きもまれたはずのものを機能させなくしている。

走る、走る、走る。
疾く、疾く、疾く。
撃つ、撃つ、撃つ。
斬る、斬る、斬る。

最早それは流れ作業。人の気配があれば撃て、そして刺し殺せ。

なんでだろう。

「ハッ、何だ…、簡単だ――」
倒れた敵兵から手榴弾を奪って、ピンを抜いて見もしない後方へ放る。

「――人殺しなんだ、もう。人じゃなくなったんだ…」
轟音。

爆風が自身をすりぬける。
炎が自分を祝福してくれてる。
灼けたコンクリートが拍手をしてくれてる。
焼けて膨らんだ人間の腹が破裂する音がパーティークラッカー。
鉄筋がクネクネと踊って僕を出迎えてきた。

「キャハッ　キャハハハハハハハハハハ！！！

ゴキリ。踏んでいた頭蓋が音を立てて砕けた。僕の中のものも。

「ハハハッ」

走る、疾くと早く、駆ける。走る走る走る走る走る走る走る走る。

人にも構わず、吸い寄せられるように、引き込まれるように、無我になって駆ける。

コウウッ

音を立てて視界が開けた。

そこには、

そこには、紅い、赤い赤い旗を持つ、

『僕達』がいたんだ。『僕達』が…。

◇◇◇

――――――

2．名古屋派遣隊六一三名
3．第五対戦車ヘリコプター隊付ＡＨ－１Ｓ十六全機（※後日詳細報告）

報告その二：第５対戦車ヘリコプター隊などの報告から、敵勢力は自衛隊と、それを指揮する勢力が加担している模様。一部では中国国旗が見られたとのこと。

二〇一一年十月十四日十九時〇二分作成

5．02v2　Breathe（後書き）

また年末へ向けて忙しくなりだしました。ですので、急に長期休載に入ることもあるやもしれません。

いつも読んでいただいている皆様には本当に申し訳ありません。

5．03　approval（前書き）

ああ、ようこらせできました。

えらく長く間が開いてしまったので、ややまとめ気味な文になっております。

半ばリハビリも兼ねて書いています。駄文拙文あると思いますが、どうかよろしくです。

5．03　approval

今日、日曜日にも拘らずこのようにお集まりいただき、誠に有難うございます。

あの日から一月と八日経ちました。

大阪が、生まれ育ったあの街が、

無残にも燃え果てたあの日から、

一月以上も経ってしまいました。

誰もが今尚、その悲しみと、怒りとで、胸を痛めていることでしょう。

そんな今こそ、私達は、決断せねばなりません。

総計百三十八万人の人々が、

命を奪われ、
心を潰され、

光を失い、
音を失い、

だからこそ、だからこそ…、

あらゆるものを犠牲にしてまで、私たちは、

護り、勝ち取らなければならないものがあります。

そしてそれは今、この場を以て、

私達の手に還ろうとしています。

有効投票総数八〇〇万票余。

うち、

賛成六二〇万票、

反対一八〇万票。

よって、

よって…、

……。

拡大関西広域連合は…、

正式に…、

本日、

二〇一一年十一月一八日に、

独立を――、

独立を宣言いたします！！！

さあ皆さん、

もう一度、今一度、

立ち上がりましょう！！

この国は、我々日本人のもんや！！！

◇◇◇

先日、“自称”拡大関西広域連合は延期していた国民投票を実施し、賛成多数で独立宣言を採択した。これに対し政府は『国民感情に政府への離反はない』として無視する姿勢を取り消し、『断固たる処置』を行い、『彼らの国民権利を剥奪し、侵略者として対処』するという旨を発表。

また、廃止された自衛隊に在籍していた犯罪者とその家族を『対処』に徴用し、また先日結ばれた対中ＦＴＡ（貿易自由協定）＋ＰｆＭＣ（警察・軍事相互協定）に基づく支援を中国政府に要請し、中国政府もまた『不正を正す行動に支援を惜しまない』として既に軍隊を派遣したと発表。ただしこの時、規模については作戦上の機密として明かされなかった。

この件については既に公式発表としては日本政府と中国政府が共同で自体の即時鎮静化を目的に『新・有事十法』の基に、“独立宣言”時など二回に亘って武力行使しているが、“自称”政府は未だ活動を止めておらず、今後我が国の死者はさらに増えるだろう。

またこの件に関しても政府は新たな憲法解釈と制度改正によって国民に『犯罪者』と『一般優良国民』という区分を作り、対処には優先して『犯罪者』を用いてゆくものとし、これは憲法上で禁止された『残虐な刑罰』には当たらないとしている。

一方で今回の事件では“ツイッター”や“フェイスブック”などのＳＮＳが事件を拡大させ、国民に混乱をもたらしたとしてこれらの規制を強化を制定した『不正情報流布防止法』『電子情報管理法』『改正警察強化法』を統合、警察の治安維持範囲を拡大・権限強化した『新治安維持法』を今国会に提出する予定である。

これに関して政府は警察の増員・増強が完成されるまで、中国軍の治安協力を締結している。政府としてはこれらを礎に日中安全保障条約の締結にこぎつけたいようだ。治安協力の期間は『警察勢力の増備・増強が完了するまで』とされているが、具体的にどのくらいの機関になるかは不明瞭な状態で、また、今年度～来年度までは震災支援の予算確保が優先されるため、実質開始されるのは平成二十五年度からになる。

◇◇◇

「ああくそぅッ！　くそぅッ！！」

足りへん。

全然足りへん。全く足りへん。一切足りへん、足りへん足りへん――！

東京政府も、アメリカも、中国も、韓国も、北朝鮮も、ロシアも、欧州も、

「ぜんっぜん情報があらへん！！」

軍務省諜報部も総務省情報庁もどこも、国外の情報を持ち合わせていない。海底ケーブルインターネットは異常切断状態が、国内無線通信ネットワークも接続できない状態が続いている。唯一、東京政府の情報を得ようとするなら、名古屋辺りまで飛んでくる僅かなＮＨＫのラヂオ電波を無理やり増幅させて、大阪・四国に配信できる程度である。

敵を倒すのも、何にしても、最も必要な「情報」が我々には欠落している。

諜報（スパイ）員を送ろうにも、軍務省公約で人員不足になって、なんとか二人送り出せた程度。

やっとこさ何とか生き返ってみても、

「俺の率いる軍務省はボロボロ、か…」

それも全治未定の重症やんか……。

そんな満身創痍の身体で挑むのは、

『外務省』

財務省でもなく、治安省でもない。『外務省』。予算は円の暴落と共に意味を失くし、広島原爆被爆者を中心とする反政府・親東京政府集団『日本をひとつに』のデモに混乱するも、その両者が既に解決策を決め、対処している。

だが、

『外務省』は違った。

ただでさえ役場の職員や志願者で構成された、ほぼ無給で働く彼らに外交知識など新聞の社説でかじった程度のものしかない。ましてその社説を、赤い赤い腐った左翼論に塗れた社説を、真実と、正論と思い込んだ彼らに、この国の威厳を外交で伝える術はなかった。

そしてその相手も、時間もいけなかった。否、其故、外務省と軍務省は対立してしまうのかもしれない。

亜米利加、欧州、東南亜細亜、前者2つは何を恐れたか返答が来ず、東南亜細亜諸国（特にフィリピン）にいたっては

「七十年前の禍根を詫びることもないのに、話を聞く余地もない」

と、そもそも連絡すら取合ってくれなかった。

周辺後進国の批判を“当然のもの”と受け取った外務省はついに軍務省叩きを開始した。自らが選んだ未来を、再び否定し、軍務省という“暴力装置”がある限り、国交は開けないと結論付けたのだ。

ところで、俺が自衛隊代表として所属する軍務省でも、諜報課の隣に外交課がある。

外務省が連絡する直前に、独自にコンタクトを取ると、四カ国だけ、応答してくれた。

どの国も日本に縁（ゆかり）ある国ばかりだった。

既にその内二カ国は支援部隊派遣の準備を始めてくれた。

それでもなお避難してくる彼らの赤っぷりは筋金入りだ。

来週開会する第一回国会に向けての省庁予備会議においても彼らのそれは炸裂し、俺の代わりに出た辰巳らと揉み合いになったそうだ。

「まるで癌や……。ほんま……あらへんわこれ……」

ぐったりと背に持たれて、何も無い天井を見つめて、
入院中迷惑かけた奴らに詫びながら、国民に謝りながら、
俺はため息をついたんだ。
……はぁぁ。

◇◇◇

「うぅん…。どないしよう……、。」

一方同じ頃、軍務省事務官員室で、同じく包帯でぐるぐる巻きになった両腕を組んで唸る、辰巳愛得(アリカ)火がいた。
村田自衛隊代表が入院している間、トップ不在の中たった一人で軍務省を取り仕切り、仲間と共に炊き出しに参加し、先日も盛大に外務省から罵倒されてきた。
そんな彼女に新たな問題が持ち込まれた。

目前にある書類の束はふたつ。それを交互に見つめ、その中を見ることもなく、今一度ため息を付く。

「はぁぁ……、。」

◇◇◇

――こんなのまとまるわけないじゃない。
だってさ―なんて更に毒づきながら私はソレ（・・）を今一度見やる。

『財政省予算概要・軍務省割当て表』
『自衛隊装備・技術研究予算概算要求』

来年度政府歳入はおよそ七〇兆円。何故それほど多額なのか。考えるまでもない。

『一ドル＝五百円』

それが答え。

そう、

現在政府は、いや、どちらかと言えば、茨木総理の独断で、数兆に登る『$（ドル）』を保有している。

彼はあの時、

何を思って造幣局に入っていったのか。

どれほどの、死をも覚悟して、中に入っていったのか。

今でも私は彼の考えを推し量ることができずにいる。

イヤ、今それを考えてはいけない。また思考が空回りする。

「いやでこれも―……、。」

かなりの難題だ。

陸海空自衛隊の要求は至極真当なものだった。

海上自衛隊　『仮称２４ＤＤＨ中型対潜航空母艦取得費用』『タンカー型原子力発電所研究・開発費用』など。

陸上自衛隊　『七四式改一一式戦車取得費用』『一二式移動高射砲

（仮称）開発費用』『ＯＨ－０１、ＯＨ－０２（仮称）攻撃ヘリ取得・開発費用』など。
航空自衛隊　『Ｆ－１５改　形態三型取得費用』『ＪＢＦ－Ｘ２０１２研究費用』『京都大学航空研究科・防衛科設立費用』など。
共同要求三ヶ条　『全都市における防空壕建設費用』、『独立防衛電子衛星取得費用』、『諜報員・防諜員育成費用』

これらを同時進行し、かつ一五年という長期的開発を見込み、その初年度として通常年よりも圧縮して三〇兆円。
対して、自衛隊に割り当てられる予定の予算は一二兆円弱。しかし外務省の抗議を受けてさらに削られる可能性は高い。

「ま、これやったらアレ（・・）やるしかないっしょ」
くい、とその細くも逞しい腕っ節を伸ばせば、彼女は小さく小さく、叫んでいた。

◇◇◇

「ふぅ」
猊下は葉巻で大きく一服される。煙が部屋一面に広がり、咳き込むのをなんとかで抑える。
「……で、では、こ、これでよろしいでしょう、か？」
中央で、がたがた震えて猊下に尋ねるものがいる。日本人だ。日本人の防衛相だ。
確か名は一川とか言ったか。
「……」
猊下は目を閉じ、座席に深く座って葉巻の吸殻をいじっておられる。彼の方が深く考えておられる証拠だ。

だが、日本人の方はというと、

「あの…、ええと……」

カタカタと音を立てて震え、沈黙に耐えられないのか、時折声を上げる。

――殺してやろうか。なあ、断（トゥワン）

……、

――待て、もう少し様子を見よう。切（シィエ）。

――どうしてだ。じれったいじゃないか。

部屋のドアの前、二人の将校の視線が直立不動のまま交錯する。

――待てというのだ。

――けどよ――…、

「…うむ。よろしい、許可しよう」

椅子から熊のように大きい体を起こして、猊下は仰った。

なんて事だ。あの猊下がお認めになるなんて…。

「ただし――――」

こぼれでた命令は。

それは、

とても痛快で、
とても斬新で、
とても愉快で、
とても新鮮で、

とても、
途方もなく、
途轍もなく、

「――残酷な、ショウだ。」

5．03　approval（後書き）

話は変わって、最近、自分の尊敬する先生と話した時、その例えに『刀を以って』といったら、『おかしい』と否定されてしまいました。柔軟性と確固たる姿勢を合わせもつ人間、もしくはそんな生き様という意味で用いたのですが、どうやら先生は例えに刀を持出すこと其物がおかしいと思っておられるようでした。

ならばあえて、誓ってみせましょう。

先生が、世間が、否定する生き様を、お乃が身を持って表してみせると。

それでは、次話か、『蒼空へ』二話か、新作か、いづれかでお会い出来ますよう、良い御年をおすごしください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5343u/

心神開発物語 -このまま滅んでたまるか!-

2011年12月24日08時46分発行